

令和2年度 Sport in Life 推進プロジェクト
(ターゲット横断的なスポーツ実施者の増加方策事業)
「部活動ボーダーレス化によるスポーツ意欲の増加」

事業報告書

令和3年2月

北海道鹿追高等学校

令和2年度 Sport in Life 推進プロジェクト
(ターゲット横断的なスポーツ実施者の増加方策事業)
「部活動ボーダーレス化によるスポーツ意欲の増加」
事業報告書

目次

本事業の目的	1
1. 本事業の実施概要	2
(1) 本事業のターゲット	2
(2) ターゲットのスポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）	3
(3) 本事業で期待される効果	5
2. 本事業の実施内容	6
(1) 事業の実施概要	6
(2) 事業の実施結果	12
3. 本事業の実施体制	43
(1) 本事業の実施体制	43
(2) 本事業の実施スキーム	43
4. 事業の実施効果（スポーツ実施頻度、実施意欲の改善効果）	44
(1) 効果検証方法	44
(2) 効果検証の結果	45
5. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）	52
6. 今後の事業展開予定	58
(1) 事業継続や横展開に向けたポイント、課題	58
(2) 次年度以降の事業継続、横展開の計画	59
(3) 今後の事業展開に向けて期待される sport in Life プロジェクトにおける取組	60
7. 終わりに	61
参考資料 アンケート調査票・分析結果詳細（別添参照）	62

本事業の目的

本事業は、スポーツ参画人口の拡大に向けて、Sport in Life コンソーシアム加盟団体である北海道鹿追高等学校が各種民間及び公共機関等と連携・協働して実施する取組を後押しするとともに、先進事例を形成することにより、全国各地にスポーツ参画人口の拡大に向けた取組を展開するためのモデルを創出することを目的に実施したものである。

1. 本事業の実施概要

地方における部活動を通したスポーツ振興は危機的な状況にある。少子化及び高校選択時の都会・大規模志向によって、地方小規模高校では部員数の少なさから部活動自体が成り立たない状況が表出している。結果として生徒がスポーツを親しむ機会が奪われ、さらにスポーツ参画率が低下するという悪循環に陥っている。本事業ではスポーツ参画率向上の方法として「する」「みる」「ささえる」の3視点からアプローチを図る。

本事業のターゲットは、北海道の郡部の鹿追高等学校に在籍する生徒であり、生徒を主体として、従来の部活動の在り方を見直し、改革案を立案・実行し、より多くの生徒が様々なスポーツに触れ、楽しむ機会を創出するプロジェクトである。本事業では外部からの専門的知見や ICT サービスの導入によりこれを実現する。

(1) 本事業のターゲット

本事業では、本校高校生の「運動部」「文化部」「帰宅部」の3属性に分類して、それぞれを主なターゲットとする。

3つの属性

属性1「体育部」：運動部加入済み

属性2：「文化部」加入済み

属性3：部活動未加入（以降、帰宅部）

(2) ターゲットのスポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）

【本校高校生のスポーツ実施を妨げている要因】

本事業のターゲットは、北海道の郡部の鹿追高等学校に在籍する生徒（1、2年生）であり、生徒を主体として、従来の部活動の在り方を見直し、改革案を立案・実行し、より多くの生徒が様々なスポーツに触れ、楽しむ機会を創出するプロジェクトである。本事業では外部からの専門的知見や ICT サービスの導入によりこれを実現する。

本校高校生のスポーツ実施を妨げている要因は次のとおりである。

- ・地方における部活動を通したスポーツ振興は危機的な状況にある。
- ・少子化及び高校選択時の都会・大規模志向によって、地方小規模高校では部員数の少なから部活動自体が成り立たない状況が表出している。
- ・結果として生徒がスポーツを親しむ機会が奪われ、さらにスポーツ参画率が低下するという悪循環に陥っている。
- ・加えてコロナウィルス感染症の拡大により、本事業の実証フィールドしている鹿追町においては、スポーツを実施する場所が限られており、高校生がスポーツをする場が限定的であることも、スポーツ実施にマイナスの影響を与えている。
- ・文化部に所属している生徒、どの部活動にも所属していない生徒は、体育の授業以外に気軽にスポーツに親しむ機会がなく、スポーツが自分にとってどのくらい意味あるものなのかを理解する機会がないことが、スポーツ実施を妨げている。

まとめると、

- 阻害要因 1 運動部生徒は自分の部活動以外のスポーツを体育の授業以外で楽しむ機会がなく、体育の授業以外で複数のスポーツの楽しみを知る機会がない。
- 阻害要因 2 部活動顧問がスポーツの専門家でないことが多く、直接専門家からスポーツに対する科学的なアプローチを学ぶ機会が少ないことから、自分や他人のスポーツ実施の意欲や支える意欲が高まらない。
- 阻害要因 3 運動部生徒に他人のスポーツ実施を支える機会がないことから、文化部や部活動未参加（以降、帰宅部）の生徒のスポーツ実施意欲が高まらない。
- 阻害要因 4 文化部、帰宅部生徒に安全で気楽にスポーツを楽しむ機会が少ないことから、スポーツ実施意欲が高まらない。

となる。

【本校高校生のスポーツ実施を増加させる要因（仮説）】

上記の阻害要因を解消するため、仮説として次の点は促進要因として挙げた。

- 促進要因 1 他の部活動に参加するなど、複数スポーツを楽しむ機会を与えることを通じて、スポーツの新たな楽しみ方を知る。

このことにより、複数の部員数の少なさからチームとして成り立たない

- 団体スポーツ（野球部、サッカー部、バスケット部）等が部活動のボーダーレス化により部員数やスポーツを好きになる生徒数が増加し、スポーツ実施時間及び意欲が向上する。
- 促進要因 2 スポーツの専門家から科学的なアプローチ等を学ぶことを通してスポーツ実施の意欲を高め、「ささえる」ための知識・技術を習得する。
 このことの実施による運動部生徒が他の生徒（文化部・帰宅部の生徒を含む）を「支える」知識・技術的な基盤が生まれる。
- 促進要因 3 実際に文化部や帰宅部の生徒のスポーツ実施に対して「支える」機会を提供する。
 このことにより、「支える」側の運動部生徒の意識の高揚が図られ、支えられる文化部・帰宅部の生徒のスポーツ実施意欲の向上が図られる。
- 促進要因 4 文化部・帰宅部の生徒にも、手軽に安全に楽しめるスポーツ実施の機会を与える。
 このことにより、スポーツを好きになる機会及びスポーツを楽しむ機会の創出につながる。

図表 1：本事業のターゲットとターゲットのスポーツ実施を促すためのポイント

ターゲット	鹿追高校全校生徒（「体育部」「文化部」「帰宅部」の3属性に分類して実施）
ターゲットのスポーツ実施を促すためのポイント	【属性 1】運動部生徒（以降、運動部） 多様なスポーツへのかかわり方を知ること通じて、部活動以外の場でも継続的にスポーツに関わることができるように促す。 ・複数スポーツを楽しむ機会を与えることを通じて、スポーツの新たな楽しみ方を知る ・スポーツを「ささえる」機会を通じて、スポーツに関する理解を深める ・文化部、帰宅部の生徒のスポーツ実施をサポートすることを通じて、多様な仲間とのスポーツとの楽しみ方を学ぶ 【属性 2】文化部生徒（以降、文化部） スポーツが手軽に安全に楽しめることを知ってもらうこと、及びスポーツをすることが自分にとって意味があることを知ってもらうことを通じて、スポーツに取り組む心理的なハードルを下げるとともに、手軽に安全にスポーツをやってみる機会を提供する。 ・スポーツが手軽に安全に楽しめることを知ってもらう ・スポーツを「する」ことが自分にとって意味あることを知る ・手軽に安全にスポーツを楽しむ機会の提供 【属性 3】部活動未加入（以降、帰宅部） スポーツが手軽に安全に楽しめることを知ってもらうことを通じて、スポーツに取り組む心理的なハードルを下げるとともに、手軽に安全にスポーツをやってみる機会を提供する。 ・スポーツが手軽に安全に楽しめることを知ってもらう ・手軽に安全にスポーツを楽しむ機会の提供

（３）本事業で期待される効果

本事業では、15～18歳の児童のスポーツ実施意欲の向上を図るとともに、プログラムの開始時と終了時において、スポーツの実施状況を調査し、習慣化に向けた検証を行う。

期待される効果は下記の通り。

属性1 体育部生徒）に対する期待される効果①

- 複数スポーツを楽しむ活動により、体育部生徒の約 50%がスポーツをすることが実施前より好きになる
- 体育部生徒の約 30%が文化部、帰宅部の生徒など他生徒のスポーツ実施を支える

属性2 文化部生徒）に対する期待される効果②

- 「する」スポーツへの心理的なハードルを下げる活動により、文化部生徒の約 50%がスポーツをすることが実施前より好きになる
- 手軽に安全にスポーツを楽しめる機会の提供により、文化部生徒の約 30%が週 1 日以上スポーツ実施時間が増加する。

属性3 帰宅部生徒）に対する期待される効果③

- 「する」スポーツへの心理的なハードルを下げる活動により、帰宅部生徒の約 50%がスポーツをすることが実施前より好きになる。

2. 本事業の実施内容

(1) 事業の実施概要

事業1：生徒主体となった部活動ボーダーレスの基盤づくり

事業1においては、阻害要因1（複数のスポーツを楽しむ機会がない）、阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）、阻害要因3（「ささえる」機会がない）、阻害要因4（安全で気楽に楽しむ機会がない）を総括的に解決するために、促進要因1（ボーダーレス化・複数スポーツを楽しむ機会を与える）、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）、促進要因3（「ささえる」機会をつくる）、促進要因4（安全で気楽にスポーツを楽しむ機会を与える）を踏まえた施策基盤をつくることを目的として、次の取組（以降、アクション）を計画した。

まずは、高校教員、生徒が中心となり鹿高ブカイクを組成し、総会・研究協議会を開催し以下の取組を実施する。本取組に関わる生徒は、すでに実施している鹿追創生プロジェクト（鹿追高校の探求プロジェクトの総称）のスポーツ分野を選択した生徒グループ（以降、スポーツ班）とする。ブカイクが主体となって、ターゲットのスポーツの実施に対する意識の向上を図る。そして、有識者の講演などを通して部活動改革プロジェクトの調査・研究を行う。

① 北海道鹿追高等学校部活動改革プロジェクトチームを組成と二極類型である「体育系部活と文化系部活」のボーダーレス化（促進要因1～4を踏まえた事業の基盤づくり・説明・啓蒙、促進要因1「ボーダーレス化・複数スポーツの楽しみを知る」の取組）

図表 2：事業1①の実施概要

事業1①-1 ACTION 1	「北海道鹿追高等学校部活動改革プロジェクトチーム（ブカイク）の組成」 ★目的 本事業の生徒の主体的な活動を生み出す基盤づくり。具体には、「総合的な探究の時間」でのスポーツ班を改めて北海道鹿追高等学校部活動改革プロジェクトチーム（ブカイク）としチームを組成する。 ※ 促進要因1～4を踏まえた事業の基盤づくり
事業1①-2 ACTION 2	「ブカイクによる本事業の主旨説明」（説明者：ブカイク代表の生徒A） ★目的 ICTの活用により、地方にしながら最先端のリモートトレーニングやモニタリングができることを理解する。また、その活用が運動部以外の生徒についても有用であることを学ぶ。 ※ 促進要因1～4の取組に関する説明・啓蒙。 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
事業1①-3 ACTION 3	「岡田武史氏との対話」（講師：岡田武史氏） ★目的 部活動のボーダーレス化やスポーツによる地方活性化の在り方、スポーツ人口の増加の方策等について理解を深める。 ※ 促進要因1（ボーダーレス化・複数スポーツの楽しみを知る）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員

② 文化部・帰宅部生徒への eSports やタグラグビーの導入（促進要因 3（「ささえる」機会をつくる）、促進要因 4「安全で気楽に楽しむ機会を与える」の取組）

スポーツ初心者やスポーツの実施にブランクのある生徒たちに対して、eSports やタグラグビーの体験を導入

図表 3：事業 1 ②の実施概要

事業 1 ②-1 ACTION 4	「e スポーツ オンライン講習会」（講師：読売巨人軍 坂東 秀憲 氏） ★目的 e スポーツという新たなスポーツ形態から、e スポーツを入り口としたスポーツへの興味関心へ意識づけ。 ※ 促進要因 4（安全で気楽に楽しむ機会を与える）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
事業 1 ②-2 ACTION 5	「タグラグビー講習会」（運営：ブカイク 対象高校生） ※内容：タグラグビーの体験 ★目的 タグラグビーを通して、スポーツが安全で気楽に楽しむことができる実感を持たせるとともに、チームワークや他人への敬意等を学び、スポーツ体験の入り口とする。 ※ 促進要因 3（「ささえる」機会をつくる）、促進要因 4（安全で気楽に楽しむ機会を与える）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員

事業 2：専門家から科学的なアプローチを学ぶ環境整備

日常の授業や進路指導、学校運営業務等で部活動顧問の負担は増加の一途を辿っている。その為、指導者の勉強時間が取れないことによるノウハウ不足や部活動現場での指導時間不足により、生徒一人ひとりのコンディションを把握しきれなくなっている。

これらが生徒の怪我や故障に繋がり、部活動の継続を阻むケースが増えており、また怪我や故障した際に対応できるアスレチックトレーナーの存在や設備といった、都会ではあたりまえの環境が整っていないことで、例えば中学の部活で怪我などを体験すると高校では運動部に入らないなど、生徒たちのスポーツの実施の継続を阻む要因となっている。

本事業では、阻害要因 2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）と位置付け、促進要因 2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえたアクションを計画した。

- ③ 学校や町のスポーツセンターやオンラインでのアスレチックトレーナーのよる指導の充実に向けた取組を実施する。(促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組)

図表 4：事業2③の実施概要

事業2③-1 ACTION 6	「LPBaseによるスポーツトレーナーの基本知識オンライン講習会」 (座学編・実技編 講師：LPbase 阿久津 洋介氏) ★目的 「座学」と「実技」を組み合わせ、トップアスリートの運動・休養・栄養等の管理や、コンディショニングについて学ぶ ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）
事業2③-2 ACTION 7	「アスリートセンタードコーチング講座」(講師：日本体育大学 伊藤 雅充 氏) ★目的 主体的なスポーツ参加の重要性について認識し、スポーツを支える側としてどのようにコーチングするべきかを学ぶ。 ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員

- ④ 医療機関や専門機関と連携し、遠隔でのスポーツリハビリテーションなどサポートを受けられる体制の構築を目指したトライアルを実施。(促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組)

図表 5：事業2④の実施概要

事業2④ ACTION 8	「スポーツ医療『SAFETY 1st プログラム』 緊急時の対応（オンライン講座）」（講師：スポーツセイフティジャパン 佐保 豊氏）。 ★目的 スポーツでのケガや事故の予防をはじめ、事故発生時の対応等を学ぶ ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
------------------	--

⑤ ICT を活用したスポーツ・モニタリングシステムを構築し、コンディションの監視による怪我防止の取組みを実践する。(促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組)

具体的には対象を、全校生徒（1、2年生）とし、ブカイクをはじめ高校生がスポーツに対する意識、実施時間、体力・運動能力等について日常的に調査するシステムをつくる。また、体力・運動能力の測定については、コンディショニング管理やトレーニング管理等の ICT サービスを導入する。適切な測定及びデータ収集・管理について、エキスパートによる教育、講演、指導などの支援を受ける。

図表 6：事業2⑤の実施概要

事業2⑤-1 ACTION 9	「ユーフォリア ONE TAP SPORTS 講習会」+ONE TAP SPORTS（フィジカルモニタリングアプリケーション）の導入（講師：小西 徹氏） ★目的 ICT を活用したモニタリングシステム技術の習得を学ぶ。 ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
事業2⑤-2 ACTION 10	「部活動改革での ICT 活用講習」（講師：NEC 大塚 洋平 氏） ★目的2 ICT を活用したリモートトレーニング管理（岡田メソッド）や IoT デバイス（スマートウォッチ）を活用した疲労度管理について学ぶ（目的1は上述） ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
事業2⑤-3 ACTION 3 （再掲）	「岡田武史氏との対話」（講師：岡田武史氏） ★目的2 遠隔で選手のコンディションを把握しながら練習メニューを提示する「岡田メソッド」の理解 ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
事業2⑤-4 ACTION 11	「岡田氏によるサッカー直接指導」（講師：岡田武史氏） ★目的 内容：岡田氏によるサッカーの直接指導 ※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組 ★ターゲット 生徒（運動部）

事業3 データ利活用による個別最適化のスポーツスタイルの提供

運動部×運動部、文化部×運動部、運動部×帰宅部といった兼部の促進にあたり、運動部の複数参画、スポーツの初心者またはブランク後の再スタートを支援し、継続的な活動につなげるための環境が必要となる。これを実現させるために、データを活用した基礎的運動能力の向上や、各種目の専門性をもった指導やアドバイスを獲得するため、外部コーチによる指導環境を整備する。さらには、高校生自身がデータ分析等を通してスポーツ指導者やアナリストとしてのスキルを獲得し、自らの部活動の分析から他者のスポーツ実施を支えるための適切で効果的な指導の実現を目指す。

本事業では、阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）と位置付け、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）、促進要因4（安全で気楽にスポーツを楽しむ機会を与える）を踏まえたアクションを次のとおり計画した。

⑥ データの利活用による生徒1人ひとりの適正にあった部活動スタイルの提供（阻害要因2（促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」）の取組）

図表7：事業3⑥の実施概要

事業3⑥-1 ACTION 9 (再掲)	「ユーフォリア ONE TAP SPORTS 講習会」+ONE TAP SPORTS（フィジカルモニタリングアプリケーション）の導入（講師：小西 徹氏） ★目的 ONETAP SPORTS で収集したデータを分析し、個別最適化したスタイルを提供するスキルを身に付ける。 ※ 促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組 ★ターゲット 生徒（運動部）
事業3⑥-2 ACTION 10 (再掲)	「部活動改革での ICT 活用講習会」（講師：NEC 大塚 洋平 氏） ★目的 スマートウォッチで収集したデータを分析し、個別最適化したスタイルを提供するスキルを身に付ける。 ※ 促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組 ★ターゲット 生徒（運動部）

⑦ 高校生向け指導者育成講習会の実施

図表8：事業3⑦の実施概要

事業3⑦ ACTION 7 (再掲)	「アスリートセンタードコーチング講座」（講師：日本体育大学 伊藤 雅充 氏） ★目的 個別最適化したスタイルを提供するコーチングスキルを身に付ける。 ※ 促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組 ★ターゲット 生徒（運動部）、指導者
--------------------------	--

⑧ 各部マネージャーをはじめとした高校生向けスポーツアナリスト講習の実施

図表 9：事業3⑧の実施概要

事業3⑧ ACTION 12	「スポーツアナリスト講習会」（講師：千葉 洋平氏） ★実施要項 ★目的 メンタル及びフィジカルのデータ収集及び分析により、選手への日常の支援に役立てる ※ 促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組 ★ターゲット 生徒（運動部のマネージャー）、指導者
-------------------	---

事業4：事業1～3に関する報告会及びスポーツ参画の動機付け

ブカイクメンバーのスポーツ振興の取組をしっかりと校内で実現するためには、校内の生徒・教職員のみならず、地域の大人達を巻き込むことが重要であると認識している。そのため、上記事業1～3の取組について、高校内だけでなく広く町民に対しても報告会を開催する。また、活動の報告をホームページ等で広く公開することで、本活動の認知高めるだけでなく全国の高校への横展開も促進する。

本事業は、阻害要因1～4に対して、実施した事業1～4を報告・啓蒙することを目的としたアクションである。

具体的な取組は以下の通り。

⑨ 本事業に参加した高校生が主体となった報告会の開催（促進要因1～4の取組の公表）

図表 10：事業4⑨の実施概要

事業4⑨ ACTION 13	「ブカイクによる最終発表会」（説明：ブカイク 対象：町民及び高校教員、高校生） ★ 目的 校内の生徒・教職員のみならず、町民にもスポーツ環境作りの重要性やその解決方策（兼部を含む）を理解し協力を得る。 ※ 促進要因1～4の取組の公表 ★ターゲット 生徒（運動部・文化部・帰宅部）、教職員
-------------------	---

⑩ 活動報告レポートの作成と公開

図表 11：事業4⑩の実施概要

事業4⑩ ACTION 14	鹿追高校 Facebook での活動報告及び本事業専門のホームページの開設 ★目的 本事業を通じた本校のスポーツ振興の取組を広報する。 ※ 促進要因1～4の取組の公表 ★ターゲット 校内外の生徒、一般人
-------------------	---

（２）事業の実施結果

事業１：「する」「みる」「ささえる」ための基盤作り

事業１①-1（ACTION１）

北海道鹿追高等学校部活動改革プロジェクトチームを組成

※ 促進要因１～４を踏まえた事業の基盤づくり

事業①の活動１として、本校生徒のスポーツ実施の全阻害要因を排除するための基盤体制づくりをすることとした。具体的には、高校教員、生徒が中心となり鹿高ブカイクを組成し、本事業の企画・運営の方針や事業工程等を協議した。なお、本組織は本事業の本部的役割を果たすこととなる。

図表 12：事業１①-1 実施結果概要

名称	「 <u>北海道鹿追高等学校部活動改革プロジェクトチーム（ブカイク）の組成</u> 」
開催日時	2020 年 10 月 12 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	（１）開会 （２）スポーツ庁事業の説明（教員から） （３）具体的な取組の方向性の確認 （４）具体的実施内容の企画・運営
参加者概要	ブカイクメンバー 15 名 （内訳）教員 2 名 生徒 13 名 knots Associates 渡辺今日子氏

参加者は、この日より、「部活動改革案」を作成する方針と活動内容について協議した。協議した内容は、以下のとおりである。

- ・毎週の「総合的な探究の時間」においてブカイクメンバーが部活動改革案を作成。
 - ・11 月 17 日には、他生徒に中間発表として改革案の素案を提示。ZOOM を活用して、knots Associates 渡辺今日子氏に対して部活動改革案を提示し、助言をいただく。
 - ・部活動改革案作成に関するブカイクの作業工程は以下のとおり。
 - a. 企業の仕組、外部とのつながりを調べる
 - b. 各スポーツ班で調べ・得た情報を整理し、課題設定
 - c. 起業・専門家からヒアリングを行い、課題解決を通して新たな価値を見つける
 - d. 課題解決をするための手立てを考案する
 - e. 分析資料をまとめ、発表資料を作成する
- ※ 今後、a～e を踏まえて、改革案を作成した。

図表 13：当日の写真



事業 1 ①-2 (ACTION 2)

二極類型である「体育系部活と文科系部活」のボーダーレス化

※ 促進要因 1～4 の取組に関する説明・啓蒙。

事業 1 の活動 2 として、阻害要因「①自分の部活動以外のスポーツを体育の授業以外で楽しむ機会がない。」「②他の運動部活動に参加することがなく、他のスポーツを知る機会がない。」を解消するために、ブカイクが目指すボーダーレス化を、他生徒や教員に伝える機会を設けた。

図表 14：事業 1 ①-2 実施結果概要

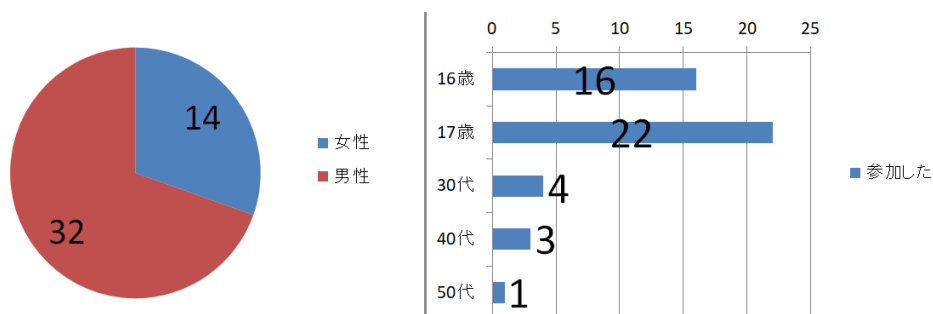
名称	ブカイクによる本事業の趣旨説明
開催日時	2020 年 10 月 15 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 部活動ボーダーレス化等の主旨説明及び協力依頼 (3) NEC からの「部活動改革での ICT 活用講習」の講師紹介 ※ これ以降は、NEC による「部活動改革での ICT 活用講習」を実施。
参加者概要	46 名 教員 8 名 生徒 38 名 (体育部 35 名、文化部 2 名、帰宅部 1 名)

ブカイクの代表者が、参加者に関してスライドを用い、部活動ボーダーレス化についても彼らの考えや今後の取組の方向性について説明した。参加者である生徒達全員は、真剣に発表の内容に耳を傾け、主旨を理解した様子であった。参加者の属性は上記参加者概要のとおり。

図表 15：当日の写真



図表 16：参加者の年齢・性別



事業1①-3 (ACTION 3)

「体育系部活」のボーダーレス化

※ 促進要因1（ボーダーレス化・複数スポーツの楽しみを知る）の取組

事業1の活動4として、阻害要因1（複数のスポーツを楽しむ機会がない）を解消するために、日本の新しいスポーツの在り方、複数スポーツの導入の在り方を目指し今治市で実践している岡田武史氏を招聘し直接とブカイクメンバー並びにサッカー部員と対話する機会を設けた。それ以外の参加者（主に教職員）は、その対話のやりとりを見守る形での参加とした。

図表 17：事業1①-3実施結果概要

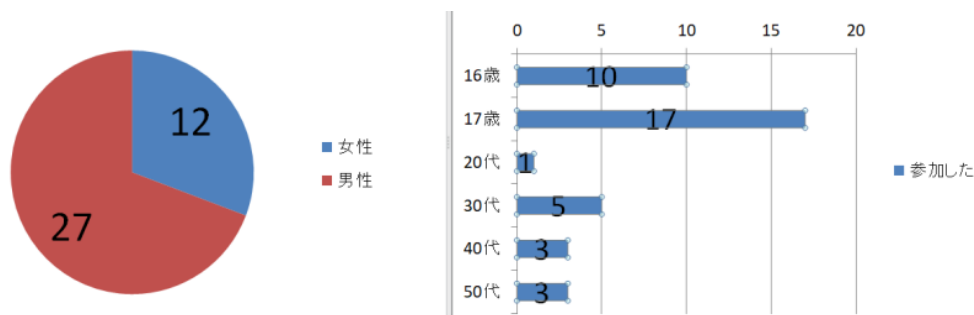
名称	「岡田武史氏との対話」
開催日時	2020 年 11 月 9 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「岡田監督のこれまでの人生」 (3) 「スポーツによる地方活性化」 (4) 「これからのサッカーとは」 (5) 「部活動活性化」 (6) 閉会 講師：岡田武史氏
参加者概要	39名 教員 12名 生徒 27名（体育部24名、文化部2名、帰宅部1名）

参加者、テーマ毎に岡田氏の考えやこれまでの実績等を知る機会を得て、緊張感と興奮の入り交じった会であった。司会はブカイクの代表生徒がつとめ、岡田氏の経験や考え等を掘り下げるなど、岡田氏と生徒との多くのやりとりが実現でき、参加者は皆積極的にメモをとったり質問も複数出るなど、活気のある雰囲気であった。また、意見交流をしたことにより、「地域創世」の意味を理解や高校生として鹿追にどう活動すべきかなどを深めた内容となった。さらに、生徒主体で運営をしたことによりリーダー性の育成やプレゼンテーション実践力の向上につながったなどの効果を把握した。

図表 18：当日の写真



図表 19：参加者の年齢・性別



事業1②-1 (ACTION 4)

安全に気楽に楽しめるスポーツ「e スポーツ」の導入

※ 促進要因 4（安全で気楽に楽しむ機会を与える）の取組

事業1②の活動として、阻害要因1（複数のスポーツを楽しむ機会がない）、阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）、阻害要因4（安全で気楽に楽しむ機会がない）を解消するために、促進要因1（ボーダーレス化・複数スポーツを楽しむ機会を与える）、促進要因4（安全で気楽にスポーツを楽しむ機会を与える）を踏まえ、e スポーツ講習会を実施した。メインのターゲットとして文化部・帰宅部をはじめ、スポーツ実施を支える立場になることを期待する運動部、さらにe スポーツという新たなスポーツの理解を促すため、教職員もターゲットとして実施した。

図表 20：事業1②-1 実施結果概要

名称	「e スポーツ オンライン講習会」
開催日時	2020 年 10 月 14 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「e スポーツの日本・世界での現状や位置づけ」 (3) 「『e スポーツはスポーツか』のディスカッション」 (4) 「e スポーツを入り口としたスポーツ導入」 講師：読売巨人軍 坂東 秀憲 氏
参加者概要	合計 45名 教員 4名 生徒 34名（体育部34名、文化部6名、帰宅部1名）

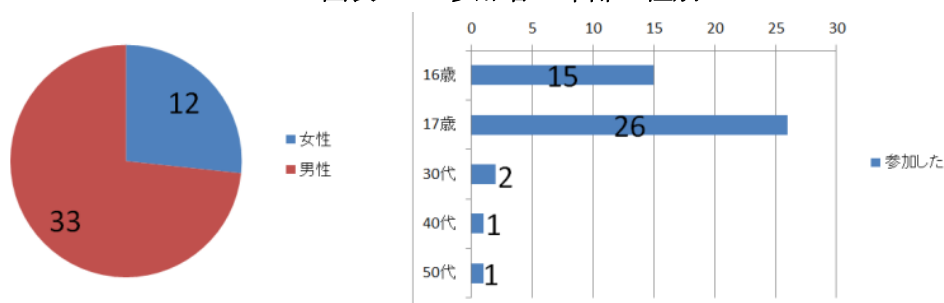
参加者は、皆一様にe スポーツの概要や日本・世界での現状や位置づけなど、e スポーツの世界について興味深く坂東氏の講話に耳を傾けていた。また、「『e スポーツはスポーツか』のディスカッション」においては、参加者はグループになって議論した。その後、複数のグループから協議内容を全体に共有し、坂東氏からコメントをいただくなど、活発なインタラクションが生まれた活気のある会となった。

特に、ターゲットとしていた文化部生徒の複数参加もあり、e スポーツを入り口としたスポーツへの興味関心へ意識づけ向上の効果を期待できる内容であった。

図表 21：当日の写真



図表 22：参加者の年齢・性別



事業1②-2 (ACTION 5)

安全に気楽に楽しめるスポーツ「タグラグビー」の導入

※ 促進要因 1（ボーダーレス化・複数スポーツを楽しむ機会を与える）、促進要因 3（「ささえる」機会をつくる）、促進要因 4（安全で気楽にスポーツを楽しむ機会を与える）を踏まえた取組

阻害要因 1（複数のスポーツを楽しむ機会がない）、阻害要因 3（「ささえる」機会がない）、阻害要因 4（安全で気楽に楽しむ機会がない）を解消するために、促進要因 1（ボーダーレス化・複数スポーツを楽しむ機会を与える）、促進要因 3（「ささえる」機会をつくる）、促進要因 4（安全で気楽にスポーツを楽しむ機会を与える）を踏まえた取組として、身体の接触を避け、安全に老若男女が楽しめる「タグラグビー講習会」を実施した。

メインのターゲットとして文化部・帰宅部の全員としているため、体育の授業内の特別企画として実施した。さらに、運動部生徒には、相手に敬意を払って支える立場になることをねらいとして、講師の村田氏にオンラインで実施していただいた。

図表 23：事業1②-2実施結果概要

名称	「タグラグビー講習会」
開催日時	2020年12月19日、23日
開催場所	北海道鹿追高等学校 体育館
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「タグラグビーとは何か」 (3) 「レスペクトマインドの重要さと実践」 (4) タグラグビー実技指導 (5) 「最高のチームを作る笑顔で働く技術」 (6) 閉式 講師：スマイルワークス 村田 祐造 氏
参加者概要	81名 教員 11名 体育部生徒 45名、文化部生徒19名、帰宅部生徒6名

図表 24：当日の写真など



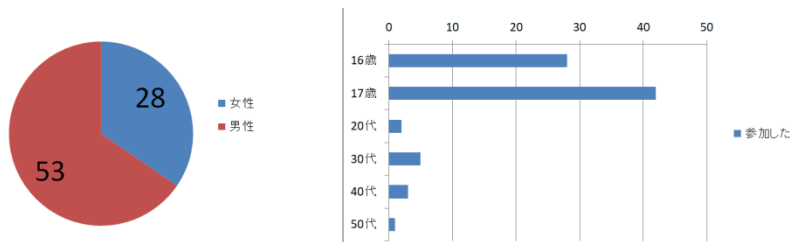
今回のオンラインを通しての講座及び実技指導について、本校にとっても初めての試みであり、様々な準備・シミュレーションが必要なため、事前シミュレーションとして12月19日（土）に本校体育館を会場に実施し、ブカイクのメンバーが中心となってタグラグビーを体験するとともに、次回12月23日（水）に1、2年生全員に対してブカイクメンバーがリーダーとなって、村田氏の指導を補助するための役割の確認もあった。教職員やその家族の参加もあり、皆安全で楽しいチームスポーツを堪能した。

12月23日（水）体育の授業を活用し、1、2年生全員を2つに分け、それぞれに2時間の講習を行った。運動部生徒以外の文化部の生徒や普段スポーツが苦手という生徒も皆楽しくこのチームスポーツを楽しんだ。

図表 25：当日の写真



図表 26：参加者の年齢・性別



事業2：専門家から科学的なアプローチを学ぶ環境整備

事業2では、阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）と位置付け、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえたアクションを実施した。

事業2③-1（ACTION 6）

アスレチックトレーナーによる指導の充実

※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組

阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）の課題を解消するため、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえた取組を実施した。特に、生徒自身が「支える」ための科学的なアプローチを学ぶために、オンラインでのアスレチックトレーナーによる指導の充実を図る内容とした。

図表 27：事業2③-1 実施結果概要

名称	「LPBase によるスポーツトレーナーの基本知識オンライン講習会」
開催日時	2020 年 座学編 10 月 28 日・実技編 11 月 14 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	【座学編】 (1) 開会 (2) 「トップアスリートが大事にしていること」 (3) 「運動・休養・栄養について」 (4) 「皮膚リリースやコンディショニングについて」 (5) 閉会 【実技編】 (1) 開会 (2) 「鹿追高校オンライントレーニング」 しゃがみ込み、片脚立ち、プレッツェル、アクティブストレッチワールド等 (3) 閉会 講師：LPbase 阿久津 洋介氏
参加者概要	35 名 教員 6 名 生徒 29 名（体育部 29 名、文化部 2 名、帰宅部 1 名）

コロナ感染対策として町のスポーツセンターで実施する予定を急遽変更して、オンラインで本校の視聴覚教室で実施した。座学編は 10 月 28 日（水）、実技編は 11 月 14 日（土）にいずれも本校視聴覚教室にてオンラインによって行われた。参加者は個人課題に焦点をあてた形で行われた。各種目ごとの可動域の特性を知りつつ、個々の特性を把握し改善する手法を、下記のプログラムにより学んだ。参加者は皆熱心に取り組み、特に実技指導においては、実際に運動可動域が広がる経験をし驚きの声があがるなど、運動可動域を上げ怪我のリスクを最小限に抑えようとする姿勢が生まれた様子であった。

【座学編】

- ・ トップアスリートが大事にしていること ・ 運動・休養・栄養について
- ・ 皮膚リリースやコンディショニングについて

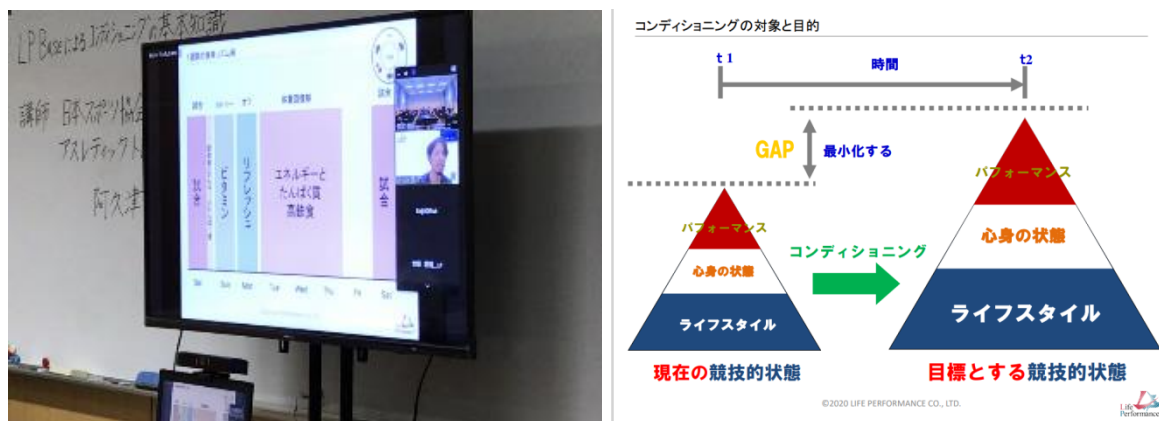
【実技編】 鹿追高校オンライントレーニング

- ・ しかがみ込み・片脚立ち
プレッツェル 1、プレッツェル 2、距骨押込み、ジャックナイフストレッチ、

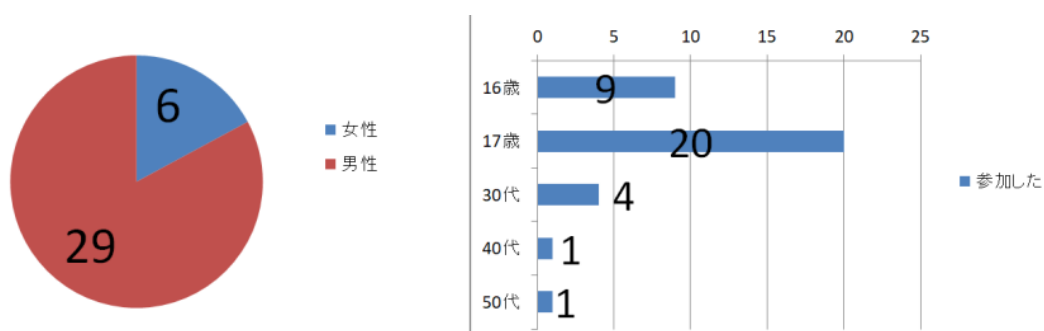
プランクショルダーアップ、サイドラインレッグアップ、
アクティブストレッチワールド

- ・肘を床につける 6 秒 ・前側の膝下に手を入れて内外回し 各 6 回
- ・クラウチングスタート姿勢で太ももストレッチ 6 秒 ・胸開き 3 回
- ・膝に手をあて胸開き 3 回 ・個人レッスンを実施

図表 28：当日の写真など



図表 29：参加者の年齢・性別



事業2③-2 (ACTION 7)

アスレチックトレーナーによる指導の充実(2)

※ 促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) の取組

阻害要因2 (科学的なアプローチを学ぶ機会がない) の課題を解消するため、促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) を踏まえた取組を実施した。特に、旧来の指導者によるトップダウンのコーチングから脱却し、アスリートを主体としたコーチングに主眼をおいた内容とした。

図表 30 : 事業2③-2 実施結果概要

名称	「アスリートセンタードコーチング講座」
開催日時	2020年11月15日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「好きこそものの上手なれ」 (3) 「主体的参加の重要性」 (4) 「練習とプレイ」 (5) 「アクティブ・ラーニングの重要性」 (6) 「遊びながら上手くなるための練習づくり」 (7) 「トップアスリートが大事にしていること」 (8) 閉会 講師：日本体育大学 伊藤 雅充 氏
参加者概要	34名 教員 7名 生徒17名 (体育部15名、文化部2名、帰宅部0名) 一般参加者 10名 (鹿追町役場、医療関係者、株式会社ユーフォリア、東急エージェンシー、RBライブツィヒ等)

オンラインでの講習で、「アスリートセンタード」という新しい視点でのコーチングの在り方について学んだ。参加者全員の表情が画面から確認することはできなかったが、ワークシートを用いた伊藤氏との対話やオンライン上でのワークショップ等の形式も相まって、非常に活発な講師とのやりとりが生まれ、参加者は積極的に受講していた。具体的な内容は次のとおり。

内容1 「好きこそものの上手なれ」

- ・ワークシートを使った個人ワーク
- ・主体的参加の重要性

内容2 「練習とプレイ」

- ・参加者の練習時間とプレイ時間
- ・あるユースチームのデータ紹介
- ・エリートスポーツ選手に成長するために、こども期に必要なスポーツ活動とは

内容3 「アクティブ・ラーニングの重要性」

- ・練習の種類経験 (個人ワーク) →ブロック、ランダム、恒常、多様
- ・技術と技能の違い
- ・学習者が主体的に学ぶことの重要性

内容4 「発見のための環境づくり」

- ・「遊びながら上手くなるための練習づくり」について
- ・小グループで練習メニューの考案
- ・全体共有

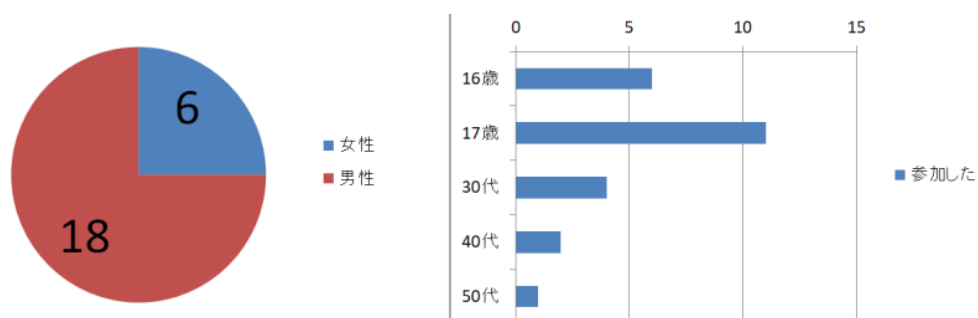
内容5 「質問ゲーム」

- ・オープン／クローズドクエスチョンを使ったゲーム

図表 31：当日の写真など



図表 32：参加者の年齢・性別



事業2④ (ACTION 8)

スポーツリハビリテーションなどサポート体制の構築

※ 促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）の取組

阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）の課題、特に、スポーツ実施上の事故防止、危機管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消するため、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえた医学的見地になったスポーツ事故防止の取組を実施した。さらに、医療機関や専門機関と連携し、遠隔でのスポーツリハビリテーションなどサポートを受けられる体制の構築を目指したトライアルとして実施した。

図表 33：事業2④実施結果概要

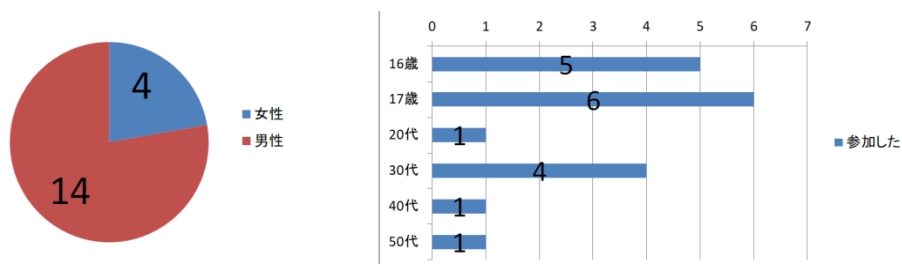
名称	「スポーツ医療『SAFETY 1st プログラム』 緊急時の対応（オンライン講座）」
開催日時	2021 年 1 月 20 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「スポーツの突然死予防」 (3) 「世界のスポーツ事故 トリプル H (Heart、Head、Heat)」 (4) 緊急時の対応のポイント ①正しい知識を身に付ける ②ものを備える ③体制を整える (5) 閉会 講師：スポーツセイフティジャパン 佐保 豊 氏
参加者概要	20 名 教員 7 名 生徒 13 名（体育部 9 名、文化部 2 名、帰宅部 2 名）

参加者は、アスレティックトレーニングやスポーツの場面における危機管理の在り方や世界の事例等を興味深く熱心に耳を傾けていた。特にトリプル H (Heart、Head、Heat)」のキーワードから詳細な対処法について多くの者がメモをとり質問も複数出るなど実に有意義な会となった。参加者の中には、本校養護教諭や医学系の進学を決めた生徒も 2 人参加した。

図表 34：当日の写真など



図表 35：参加者の年齢・性別



事業2⑤-1 (ACTION 9)

スポーツモニタリングシステムの構築 (1)

※ 促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) の取組

阻害要因2 (科学的なアプローチを学ぶ機会がない) の課題、特に、スポーツ実施上の事コンディショニング管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消するため、促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) を踏まえたスポーツモニタリングの取組を実施した。ICTを活用したスポーツ・モニタリングシステムを構築し、コンディションの監視による怪我防止についてもねらいとする。

図表 36 : 事業2⑤-1 実施結果概要

名称	「ユーフォリア ONE TAP SPORTS 講習会」
開催日時	2020 年 10 月 13 日、11 月 14 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) ICT 活用・モニタリングシステムにおける技術指導 (3) 「ONE TAP SPORTS の活用術」についてスポーツ庁事業の説明 (3) 体育部、文化部ボーダーレスの奨励 (4) 閉会 講師：ユーフォリア 小西 徹 氏
参加者概要	47 名 教員 8 名 生徒 39 体育部生徒 36 名、文化部生徒 2 名、帰宅部生徒 1 名

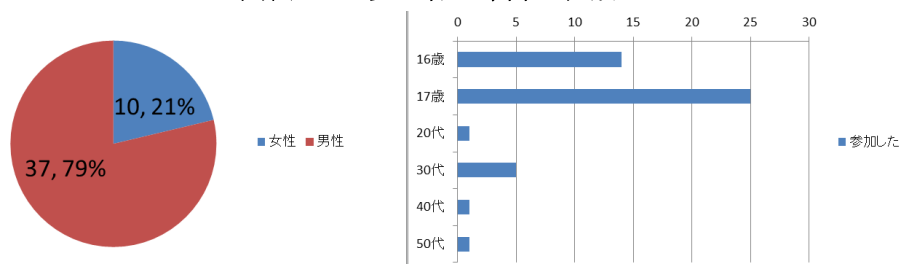
10月13日(火)の講習会では、参加者は皆、モニタリングという聞き慣れない考えがどのようなものなのか大変高い興味を示し、「ICT活用・モニタリングシステムにおける技術指導」、「One tap sports の活用術」という小西氏からのオンラインでの講習を熱心に聴講した。後半には、内容をさらに掘り下げるためにグループワーク、そして質疑応答と講師と参加者が活発なやりとりを行った。具体的には、どれくらいの期間データを取れば統計が出るのか、全国でワンタップスポーツを取り入れている高校はどれくらいあるのか等の質問により、多くの情報を参加者は引き出し、これから行うコンディション管理を行う上で効果的な導入となった。

図表 37：当日の写真など



11月14日（土）の講習会では、実際に One Tap Sports アプリを参加者の端末（スマホ）に導入して、具体的な One Tap Sports の使用の仕方や留意点等について学んだ。この講習及びその後の実践によりスポーツ・運動に対する生徒自身のコンディショニングについて理解が高まり、参加者はコンディショニング管理を積極的に活用するようになった。

図表 38：参加者の年齢・性別



事業2⑤-2 (ACTION 10)

スポーツモニタリングシステムの構築 (2)

※ 促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) の取組

事業2⑤-1と同様、阻害要因2 (科学的なアプローチを学ぶ機会がない) の課題、特に、スポーツ実施上の事コンディショニング管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消するため、促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) を踏まえたスポーツモニタリングの取組を実施した。これについても、ICTを活用したスポーツ・モニタリングシステムを構築し、コンディションの監視による怪我防止等についてもねらいとする。

図表 39 : 事業2⑤-2 実施結果概要

名称	「部活動改革での ICT 活用講習会」
開催日時	2020 年 10 月 15 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) ブカイクからの部活動ボーダーレス化の説明 (3) 「スポーツ指導における ICT 活用講習会」 (4) 「IoT デバイス (スマートウォッチ) 疲労度の見える化」 (5) 「リモートトレーニング管理 (岡田メソッド)」 (4) 「主観によるコンディション管理」「e スポーツを入り口としたスポーツ導入」 講師: NEC 大塚 洋平 氏
参加者概要	46 名 教員 8 名 生徒 38 名 (体育部 35 名、文化部 2 名、帰宅部 1 名)

参加者は NEC 大塚氏から本校に ICT を使いどのように携わっていくのかの全体像を提示され、「ケガしない身体づく」「トップアスリートを指導するアスレチックトレーナー講演会」とのつながりと方向性について説明を受け、皆熱心に耳を傾け、多くの質問も飛び出した。特に、ICT 活用でのモニタリングシステムにおいて、岡田メソッドのリモートトレーニング管理や IoT デバイス (スマートウォッチ) による疲労度の見える化、主観と客観によるコンディション管理について学んだ。グループワークもあり、より高いスポーツ意欲の意識づけとなった様子であった。

図表 40：当日の内容、様子の写真

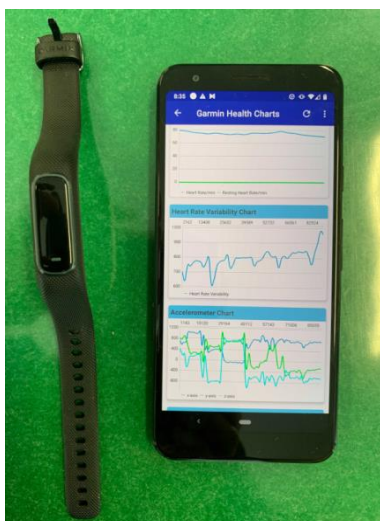
NEC 大塚

今回実施予定のICT関連全体像

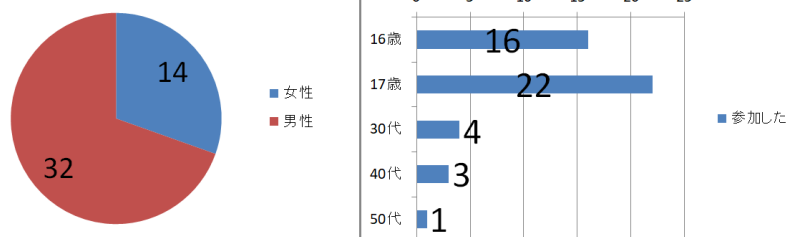
【実施内容】

- ① 外部コーチや有識者によるトップレベルの指導環境の整備
- ② 医療機関、専門機関と連携したI.R.、リハビリ環境の整備
- ③ I.T.活用でのデータモニタリングシステムの導入
- ④ データ活用による選手の選手力向上による競争力の向上

① 分からない身体づくり 【事例】	② ICT活用でのモニタリングシステム		
・ トレーニングシートを最適化する「デジタルシート」の開発と活用 ・ 動画サイトによる選手指導のサービス提供	① リモートトレーニング環境 【例】 ・ 遠隔モニタリング（画像）を活用したトレーニング指導のサービス提供	② IoTデバイス 活用による活用 ・ スマートウォッチで選手の状態を可視化するサービス提供	③ コンディション管理 ・ スマートモニタリングシステム（主観データ） ・ データ活用 ・ ④ データ活用による競争力の向上



図表 41：参加者の年齢・性別



事業2⑤-3 (ACTION 3)

スポーツモニタリングシステムの構築 (3)

※ 促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) の取組

事業2⑤-1,2と同様、阻害要因2 (科学的なアプローチを学ぶ機会がない) の課題、特に、スポーツ実施上の事コンディショニング管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消するため、促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) を踏まえたスポーツモニタリングの取組を実施した。これについても、ICTを活用したスポーツ・モニタリングシステム、特に、「岡田メソッド」の活用の一貫、「岡田メソッド」の考え方等を理解する時間としても実施した。なお、参加者の年齢・性別についても事業1③-3と同じである。

図表 42 : 事業2⑤-3 実施結果概要

名称	「岡田武史氏との対話」
開催日時	2020年11月9日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「岡田監督のこれまでの人生」 (3) 「スポーツによる地方活性化」 (4) 「これからのサッカーとは」 (5) 「部活動活性化」 (6) 閉会 講師：岡田武史氏
参加者概要	39名 教員 12名 生徒 27名 (体育部24名、文化部2名、帰宅部1名)

事業2⑤-4 (ACTION 11)

スポーツモニタリングシステムの構築 (4)

※ 促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) の取組

事業2⑤-1, 2, 3と同様、阻害要因2 (科学的なアプローチを学ぶ機会がない) の課題、特に、スポーツ実施上の事コンディショニング管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消するため、促進要因2 (「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ) を踏まえたスポーツモニタリングの取組を実施した。これについては、事業2⑤-3の「岡田メソッド」の活用の実技バージョンとして、本校生徒・教員のみならず、町内の少年団や中学校に所属する選手及び指導者の参加も可能として行った。

図表 43：事業2⑤-4実施結果概要

名称	「岡田氏によるサッカー直接指導～岡田メソッドローンチデイ～」
開催日時	2020年11月9日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 挨拶、目標の説明 (3) パス&コントロール (4) エクササイズ (2VS2 + 1S + 1T) (5) ゲーム (3VS3 + GK、4VS4 + GK) (6) 講評 (7) 閉会 講師：岡田武史氏
参加者概要	56名 スポーツ指導者 13名 高校生 6名 (サッカー部) 中学生 11名 (サッカー部) 小学生 14名 (サッカー少年団) 保護者・地域住民 12名

参加者は、小学生から高校生まで31名、指導者13名と実際に、NECデジタルプラットフォームで遠隔から提供するサッカー理論「岡田メソッド」をスタートする機会として、岡田武史氏から直接指導していただき、感激の様子であった。

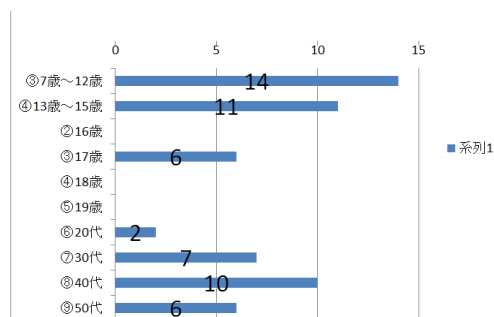
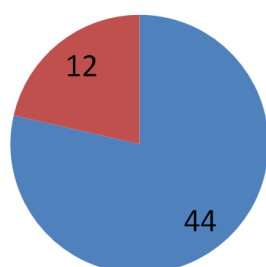
さらに、本校のみならず鹿追町として正式な「岡田メソッド」の開始日として、「岡田メソッドローンチデイ」と称して実施した。

図表 44：当日の写真など



参加者は、非常に熱心に岡田氏のコーチングにより岡田メソッドの考え方や実際のプレーの仕方まで学んだ。参加者達の眼の色がかわったのはもちろんのこと、今後 iPad を通してトレーニングメニューの基本軸となる「岡田メソッド」を真剣に取り組んでいた。

図表 45：参加者の年齢・性別



事業3 データ利活用による個別最適化のスポーツスタイルの提供

事業3⑥ (ACTION 9)

データ利活用による生徒1人ひとりの適正にあった部活動スタイルの提供 (1)

※ 促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組

本アクションは阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）と位置付け、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえたアクションを次のとおり実施した。特にモニタリングで収集したデータをどのように分析し、指導やサポートに活かしていくかに取り組んだものである。なお、参加者の年齢・性別については事業2⑤-1と同じである。

図表 46：事業2⑤-2実施結果概要

名称	「ユーフォリア ONE TAP SPORTS 講習会」
開催日時	2020年10月13日、11月14日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) ICT活用・モニタリングシステムにおける技術指導 (3) 「ONE TAP SPORTS の活用術」についてスポーツ庁事業の説明 (3) 体育部、文化部ボーダーレスの奨励 (4) 閉会 講師：ユーフォリア 小西 徹 氏
参加者概要	47名 教員 8名 生徒39 体育部生徒36名、文化部生徒2名、帰宅部生徒1名

事業3⑥ (ACTION 9)

データ利活用による生徒1人ひとりの適正にあった部活動スタイルの提供 (2)

※ 促進要因2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組

本アクションは阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）と位置付け、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえたアクションを次のとおり実施した。特にモニタリングで収集したデータをどのように分析し、指導やサポートに活かしていくかに取り組んだものである。なお、参加者の年齢・性別については事業2⑤-1と同じである。

図表 47：事業3⑥-（2）実施結果概要

名称	「部活動改革での ICT 活用講習会」
開催日時	2020 年 10 月 15 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) ブカイクからの部活動ボーダーレス化の説明 (3) 「スポーツ指導における ICT 活用講習会」 (4) 「IoT デバイス（スマートウォッチ） 疲労度の見える化」 (5) 「リモートトレーニング管理（岡田メソッド）」 (4) 「主観によるコンディション管理」「e スポーツを入り口としたスポーツ導入」 講師：NEC 大塚 洋平 氏
参加者概要	46 名 教員 8 名 生徒 38 名（体育部 35 名、文化部 2 名、帰宅部 1 名）

事業3⑦（ACTION 7）

高校生向け指導者育成講習会の実施

※ 促進要因 2「ささえるための科学的アプローチ等を学ぶ」の取組

本アクションは、阻害要因 2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）の課題、特に、スポーツ実施上のコンディショニング管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消し、運動部員が他者のスポーツ実施をささえる指導者となるために、促進要因 2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえた高校生指導者講習会を実施した。なお、参加者の年齢・性別については事業2③-2 と同じである。

図表 48：事業3⑦実施結果概要

名称	「アスリートセンタードコーチング講座」
開催日時	2020 年 11 月 15 日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) 「好きこそものの上手なれ」 (3) 「主体的参加の重要性」 (4) 「練習とプレイ」 (5) 「アクティブ・ラーニングの重要性」 (6) 「遊びながら上手くなるための練習づくり」 (7) 「トップアスリートが大事にしていること」 (8) 閉会 講師：日本体育大学 伊藤 雅充 氏
参加者概要	34 名 教員 7 名 生徒 17 名（体育部 15 名、文化部 2 名、帰宅部 0 名） 一般参加者 10 名（鹿追町役場、医療関係者、株式会社ユーフォリア、東急エージェンシー、RB ライプツィヒ等）

事業3⑧ (ACTION 12)

各部マネージャーをはじめ高校生向けスポーツアナリスト講習の実施

本アクションは、阻害要因2（科学的なアプローチを学ぶ機会がない）の課題、特に、スポーツ実施上のコンディショニング管理について学ぶ機会がないという阻害要因を解消し、運動部のマネージャーが他者のスポーツ実施をささえる指導者となるために、促進要因2（「ささえる」ための科学的アプローチ等を学ぶ）を踏まえたマネージャー用の指導者講習会を実施した。

図表 49：事業3⑧実施結果概要

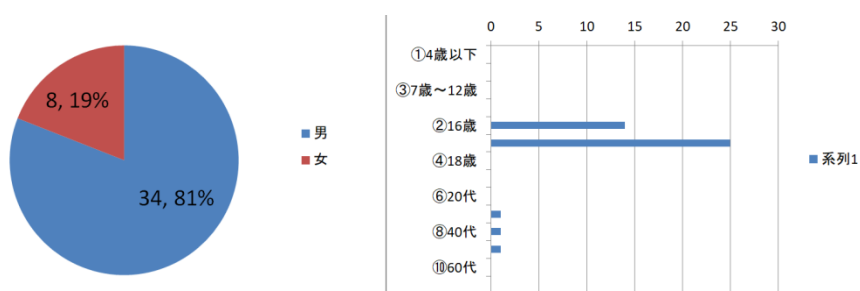
名称	スポーツアナリスト講習会 ～ICT活用・モニタリングシステムにおけるデータ分析講習会 One tap sports の活用術～
開催日時	2020年12月7日（月）16:00～17:30 対面型講習会
開催場所	北海道鹿追高等学校（視聴覚室）
アジェンダ	（1）開会 （2）「メンタル及びフィジカルのデータ活用の実例」 （3）「データの分析方法」 （4）「ONE TAP SPORTS の活用方法」 （5）閉会 講師：公益財団法人日本フェンシング協会 強化部アナリスト 千葉洋平氏
参加者概要	42名 教員 3名 生徒39名（体育部36名、文化部2名、帰宅部1名）

参加者は、オンラインの講習でありながら、千葉氏の日本代表フェンシングチームを支援した際のデータ分析及び分析結果を戦略に結びつける仕組み等の願望をわかりやすく説明していただき、大変興味深く聴講していた。また、本校で実際に行っているコンディショニング管理ツールのONE TAP SPORTS から得たデータをどのように分析し、競技力の強化を図るかの方法を説明していただき、途中、画面を通して千葉氏との応答も生まれ、活気のある講習会となった。

図表 50：図表 22 当日の写真など



図表 51：参加者の年齢・性別



事業4 事業1～3に関する報告会及びスポーツ参画の動機付け

校内の生徒・教職員のみならず、地域の大人達をブカイクの活動に巻き込み、ブカイクの校内の動きを加速させることを目的として、上記事業1～3の取組についての報告会を開催した。また、事業の内容をホームページ等で広く公開することで、本活動の認知高めるだけでなく全国の高校への横展開の促進をもねらいとした。

本事業は、阻害要因1～4に対して、実施した事業1～4を報告・啓蒙することを目的としたアクションである。

事業4⑨ (ACTION 13)

高校生が主体となった報告会の開催

※ 促進要因1～4の取組の公表

阻害要因1～4を解消するために、校内の生徒・教職員のみならず、地域の大人達をブカイクの活動に巻き込み、ブカイクの校内の動きを加速させることを目的として、上記事業1～3の取組についての報告会を開催した。

図表 52：事業4⑨実施結果概要

名称	「ブカイクによる最終発表会」 (説明：ブカイク 対象：町民及び高校教員、高校生) 内容：解決方策（兼部を含む）の提案
開催日時	2021年1月20日
開催場所	北海道鹿追高等学校
アジェンダ	(1) 開会 (2) マルチスポーツの可能性（ブカイク1班） (3) スポーツフェスティバルの開催（ブカイク2班） (4) スポーツ人口増加に向けて（ブカイク3班） (5) スポーツ庁 久田春生氏からの講評 (6) 閉会
参加者概要	29名 教員4名、町民2名、町外3名 生徒20名（体育部生徒14名、文化部生徒3名、帰宅部生徒3名）

コロナ感染対策のため、開催地を当初予定していた町民ホールから本校による開催に変更した。これにより多くの町民の参加は叶わなかったことや参加生徒数も4会場に分散して実施したことにより4分の1程度の参加となった。しかし、オンラインで東京、札幌とつないだことにより、プロボノメンターとしてブカイクに指導・助言をしてくれた **Knots Associate** の渡辺氏、富田氏、北海道大学教育学部の篠原准教授などの有識者の参加が可能となった。特に、スポーツ庁の久田春生氏もオンラインで参加いただき、各種質問から、最後は講評という形でブカイクの活動を応援してくれた。参加した町民や教職員、生徒はあらためてブカイクの取組や今後の方向性を確認することができ、好意的な反応を示していた。

図表 53：当日の写真など



以下はブカイク生徒の発表資料

○ ブカイク1班の「マルチスポーツの可能性」のスライド資料（抜粋）

図表 54：ブカイク1班スライド資料抜粋

様々な部活を実際に体験してみての感想

（所属：野球部）
田村：体験した部活・テニス部
感想→動きなどが野球に通ずる所があってやりやすかった。

（所属：バドミントン部）
前川：体験した部活・陸上部（中・長距離）
感想→網球など自身の部活にも活かせる能力が鍛えられた。

なぜ、プロスポーツ選手のような技術を培うのが大変なのか、どうすれば培うことが可能か

培うのが大変な理由

- ・自分で自分の管理をしきれない
- ・プロが行っている練習法の正解がわからない
- ・部活内の人数が多く、指導者の目が行き届いていないなど...

「ならば、どうすれば培うことができるのか？」

9月～12月までのスポーツ班の取り組みの一つ
～ラグビーの新たな試み・実践～

マルチスポーツの可能性

鹿迫高校でマルチスポーツを実施し、兼部を可能にして少しでも多くの人に部活動を体験してもらおう。

↓

鹿迫高校が部活動に積極的な高校となり、学校内での体育祭などの事業も、活性化し、兼部を通して様々な才能や可能性を持つ選手の発掘を学校全体で応援する。

VRなどを利用したスポーツの活性化とは

VRやZOOMを使用し校内の部活における選手各個人のレベルアップを目的とする考え

主な使用例（VR）
室内で走だけのルームランナーに景色や走路のVRを使用し、本当に走路で走っているような感覚になり、より本番に近い練習ができる。

主な使用例（ZOOM）
外部コーチなどにZOOMを通して指導をしてもらう、各スポーツにおける心構えや競技者としての精神の相談などができる。

まとめ

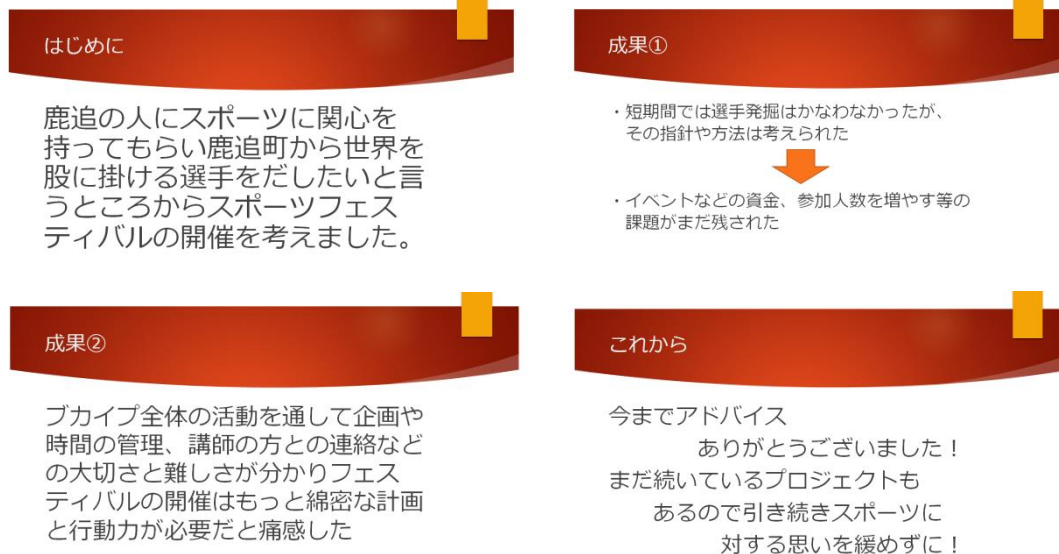
マルチスポーツを実施し、VRを活用することにより、鹿迫高校が部活動に積極的な高校となり、学校内での体育祭などの事業も活性化し、兼部を通して様々な才能や可能性を持つ選手の発掘を学校全体で応援する環境づくりになる。

↓

鹿迫高校がこれらの活動をするにより本校生徒はもちろん、町民の方々にも様々なスポーツを通して学校全体の活性化、さらには町の活性化につながっていくと考ええる。

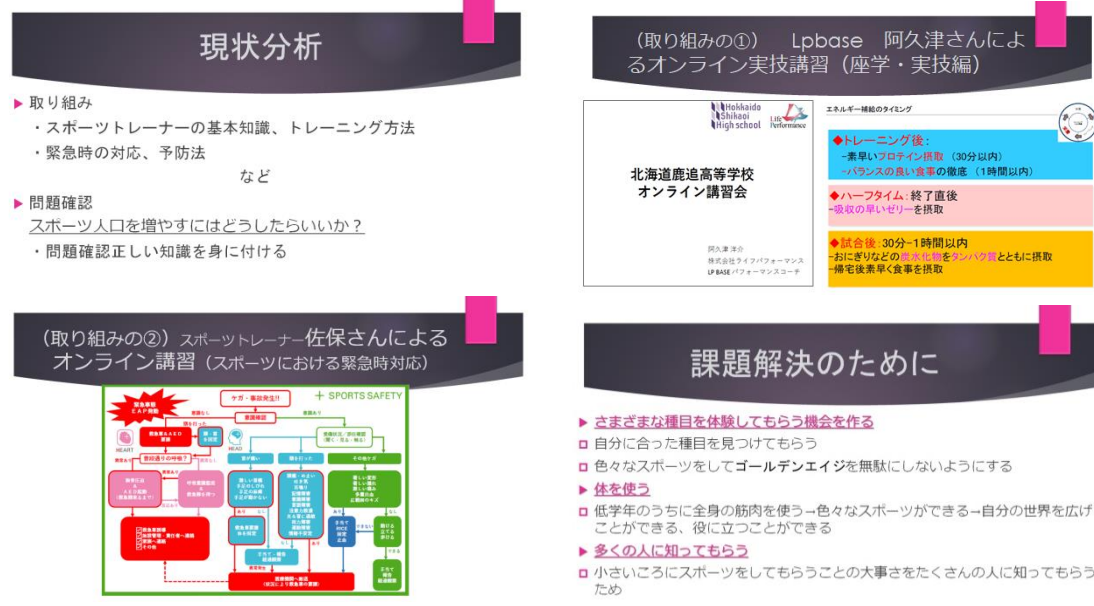
- ブカイク2班の「スポーツフェスティバルの開催（ブカイク2班発表）」のスライド資料（抜粋）

図表 55：ブカイク2班スライド資料抜粋

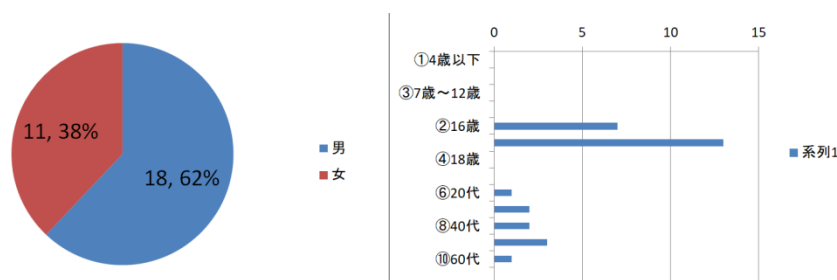


- ブカイク3班の「スポーツフェスティバルの開催（ブカイク2班発表）」のスライド資料（抜粋）

図表 56：ブカイク3班スライド資料抜粋



図表 57：参加者の年齢・性別



事業4⑩ (ACTION 14)

活動レポートの作成と公開

※ 促進要因1～4の取組の公表

阻害要因1～4を解消するために、ブカイクの活動を本校生徒、町民、町外のスポーツ関係者に知ってもらい、ブカイクの校内の動きを促進することを目的に、事業の内容をホームページ等で広く公開した。(URL: <https://shikaoihs-sports.com/>)

図表 58：事業4⑩実施結果概要

名称	本校公式ホームページ「スポーツフォな生活」の公開
開催日時	2021年2月12日～
開催場所	URL: https://shikaoihs-sports.com/
内容	(1) 開会 (2) 本校の Sport in Life 事業の概要 (3) 新たな部活動像を創ろう (4) 鹿追創生アカデミア構想 (5) ブカイクによる部活動改革 (6) 岡田メソッド×鹿追高校
閲覧者概要	スポーツ振興に関心のある人 (予定)

図表 59：HP内の写真など 1 / 4



図表 60：HP内の写真など 2 / 4



図表 61：HP内の写真など 3 / 4



図表 62：HP内の写真など 4 / 4

ホーム > 全ての記事 > 部活動 > 「ブカイク」による部活動改革！

「ブカイク」による部活動改革！

© 2021年2月10日 プロジェクト



北海道鹿追高等学校は、「ブカイク」による部活動改革を推し進めています！

ぜひ、以下の動画を一度ご覧ください！活動の一端についてご理解いただけたと思います。

アーカイブ

2021年2月 (1)

2020年12月 (3)

タグ

サッカー (1) 部活動 (2)

プロジェクト (3) メディア掲載 (1)

実技指導 (1)

閲覧者数や閲覧者の年齢・性別及び事業の実施効果については調査しておらず、次年度以降の課題として改善する予定である。

3. 本事業の実施体制

(1) 本事業の実施体制

本事業の実施体制は下記の通り。

図表 63：事業の実施体制

実証フィールド	北海道鹿追高等学校*、鹿追町
代表団体	北海道鹿追高等学校*（全校生徒 140 名 主な対象 1，2 年）
構成団体	鹿追町教育委員会*、北海道鹿追高等学校体育文化後援会、北海道鹿追高等学校部活動活性化プロジェクト実行委員会、knots associates 株式会社、一般社団法人 Sports X Initiative*、日本電気株式会社* ※ 「*」は Sport in Life コンソーシアム加盟団体
構成団体以外の参画団体	鹿追高校全校生徒（「体育部」「文化部」「帰宅部」の 3 属性に分類して実施）

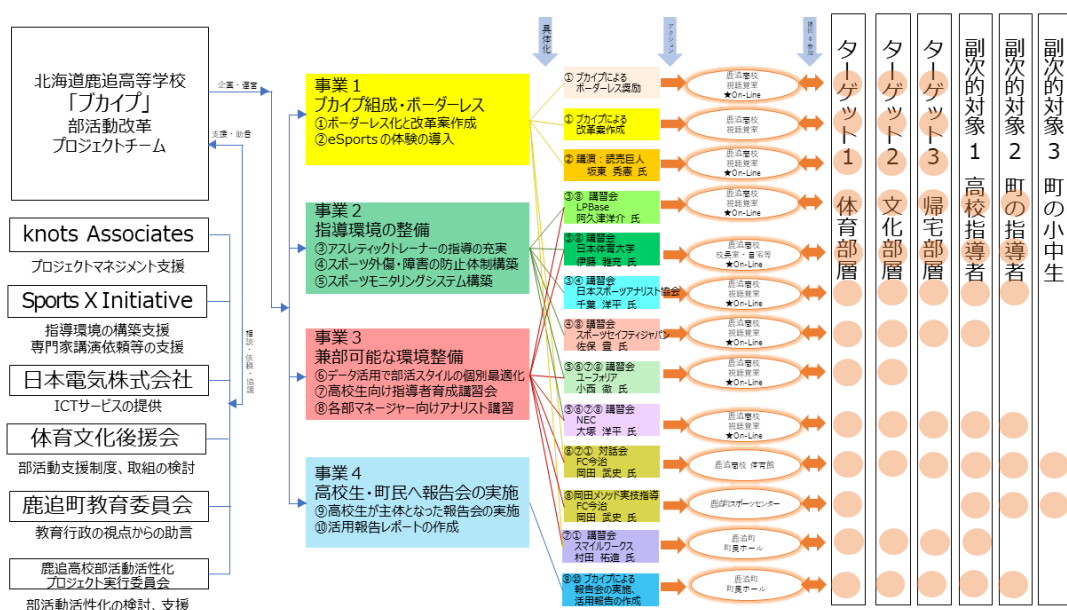
※ 「*」は Sport in Life コンソーシアム加盟団体

(2) 本事業の実施スキーム

代表団体、構成団体、その他参画団体の役割は下記の通り。

本事業における事業 1～4 は、代表団体「北海道鹿追高等学校」が中心となって、構成団体である北海道鹿追高等学校部活動活性化プロジェクト実行委員会、knots associates 株式会社、一般社団法人 Sports X Initiative、日本電気株式会社が有するネットワーク及び経験、ノウハウを活用してプログラムを策定する。

図表 64：本事業のスキーム図



4. 事業の実施効果（スポーツ実施頻度、実施意欲の改善効果）

（１）効果検証方法

【高校生（運動部）の実施効果及び検証方法】

本校高校生に対して実施した事業の効果を検証するために、下記のような考え方で事前、事後、追跡調査を行い、スポーツへの取組意欲向上、及び習慣化に関する効果検証を実施した。期待される効果と検証方法は下記の通りである。

図表 65：期待される効果と検証方法（運動部）

ターゲット	現状	目標	効果検証方法
運動部	—	スポーツ実施意欲の向上 50%	事後のアンケート調査結果から分析
	—	スポーツ支援意欲の向上 30%	事後のアンケート調査結果から分析
	他の運動部活動の参加 0%	他の運動部活動の参加 30%	事前状況の聞き取り調査、事後のアンケート調査結果から分析

【高校生（文化部・帰宅部）の実施効果と検証方法】

本校高校生に対して実施した事業の効果を検証するために、下記のような考え方で事前、事後、追跡調査を行い、スポーツへの取組意欲向上、及び習慣化に関する効果検証を実施した。期待される効果と検証方法は下記の通りである。

図表 66：期待される効果と検証方法（文化部・帰宅部）

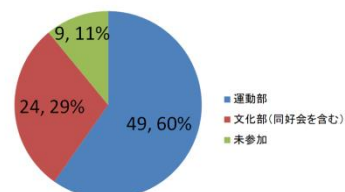
ターゲット	現状	目標	効果検証方法
文化部	—	スポーツ実施意欲の向上 50%	事後のアンケート調査結果から分析
	スポーツ実施頻度 66%	スポーツ実施頻度 70%	事後のアンケート調査結果から比較分析
帰宅部	—	スポーツ実施意欲の向上 50%	事後のアンケート調査結果から分析
	スポーツ実施頻度 84%	スポーツ実施頻度 85%	事後のアンケート調査結果から比較分析

（２）効果検証の結果

前提として、生徒の回答者 82 人のうち運動部活動に所属しているのは 49 人で 60％であり、文化部 24 名（29％）、未参加つまり帰宅部が 9 名（11％）である。

以降、事業実施前のアンケートをプレアンケート、実施後のアンケートをポストアンケートと呼ぶ。

図表 67：部活動所属割合



【高校生（運動部）の実施効果】

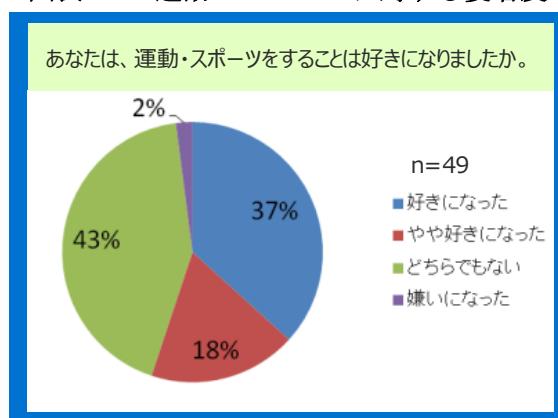
生徒全員のうち 49％が運動部（49 名）であり、本事業の実施効果を事前・事後アンケートにより検証した。

1 運動部のスポーツの実施意欲の改善について

(1) 本プログラムで運動・スポーツに対する愛着度

ポストアンケート設問「ブカイクの活動に参加した後（10 月以降）、あなたは、運動・スポーツをすることは好きになりましたか。」の質問により、「好きになった」（18 名）、「やや好きになった」（9 名）と答えた生徒は 55％であり、「どちらでもない」（21 名）は 43％、「嫌いになった」（1 名）が 2％となり、約半数以上の運動部の生徒が、ブカイクによる本事業により、スポーツが好きになったと回答している。

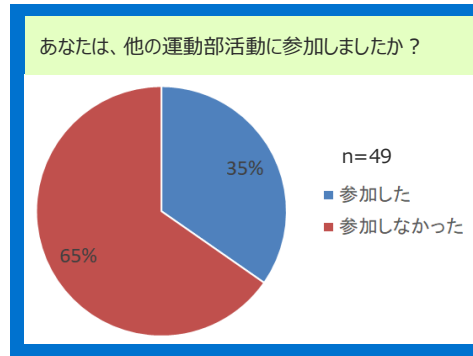
図表 68：運動・スポーツに対する愛着度



(2) 部活動ボーダーレス化によるスポーツの意欲・技術向上について

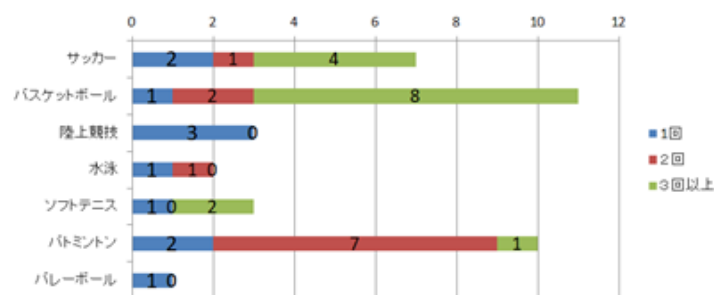
ブカイクが進めてきた部活動ボーダーレス化（運動部活・文化部・帰宅部の人が他の運動部活動へ参加すること）との関連について分析した。前提として、顧問等からの聞き取り調査によると、プログラム前の段階において、他の部活動に参加している者ゼロであった。ポストアンケートにおける設問「あなたは、他の運動部活動に参加しましたか？」に対して、運動部回答者（49 人）のうち 35％（17 人）が参加したと回答している。

図表 69：他の運動部活動への参加割合



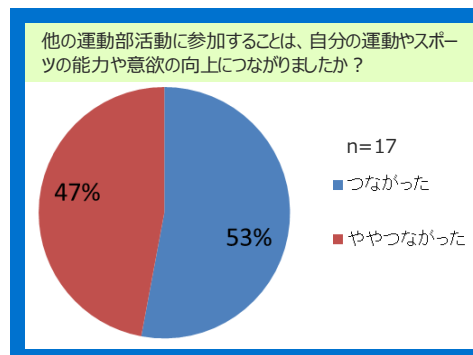
17名の参加した部活動（バレーボールと水泳は部活動ではなく校外のスポーツ団体）の内訳において、部員数が規定選手数に満たない部活動であるサッカー部やバスケットボール部への参加も多く、実際、サッカー部は秋の新人戦の選手として、野球部3名の生徒も登録し、単独チームとして出場することができた。このことも、ボーダーレス化の取組の成果としてサッカー部の生徒の中に、肯定的な意識を生んでいるのは事実である。

図表 70：他の運動部活動への参加回数



17名の他の運動部活動に参加した生徒にスポーツ意欲につながる設問「他の運動部活動に参加することは、自分の運動やスポーツの能力や意欲の向上につながりましたか？」に対して、「つながった」との回答は53%（9名）で、「ややつながった」は47%（8名）であり、参加者全員がスポーツの能力や意欲の向上につながったことを示している。このことから、部活動ボーダーレス化の取組が、運動部生徒のスポーツ意欲の向上につながっていることが言える。

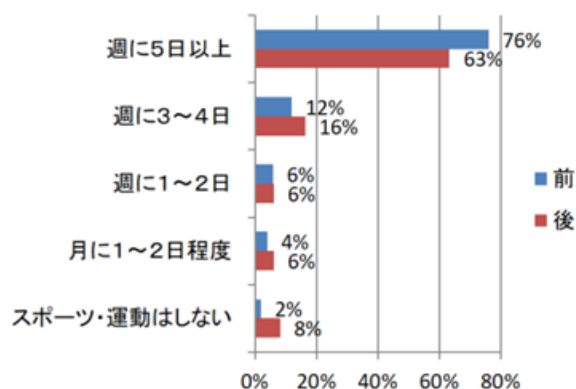
図表 71：他の運動部活動への参加による運動能力・意欲の向上



2 運動部生徒のスポーツ実施の習慣化について

プレアンケートとポストアンケートで調査した結果、「週に1～2日以上」の実施した運動部生徒は、プレで94%、ポストで85%で、9p下がっている。

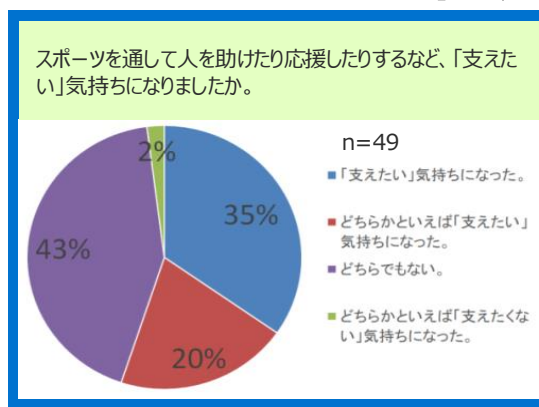
図表 72：運動部生徒のスポーツ実施の習慣



3 スポーツを「支える」意欲の向上について

設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、スポーツを通して人を助けたり応援したりするなど、「支えたい」気持ちになりましたか。」に対して、**55%の運動部生徒が支えたい気持ちになったと回答**している。半数以上が「支えたい」気持ちになったことは本事業を進める上での成果ともいえる。

図表 73：スポーツを通した人を「支える」意欲の向上



【文化部の実施効果】

【文化部の実施効果】

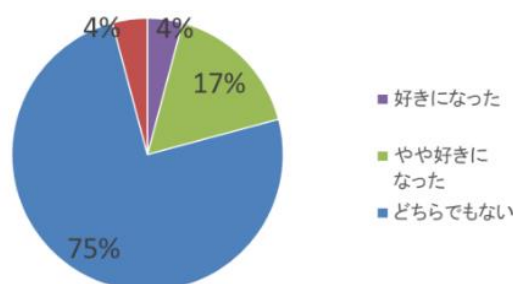
生徒全員のうち29%が文化部（24名）であり、本事業の実施効果を事前・事後アンケートにより検証した。

1 文化部生徒のスポーツの実施意欲の改善について

(1) 運動・スポーツが好きになったか？

ポストアンケート設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、あなたは、運動・スポーツをすることは好きになりましたか。」の質問により、「好きになった」（1名）、「やや好きになった」（4名）と答えた生徒は21%であり、「どちらでもない」18名は75%、「やや嫌いになった」（1名）が2%となり、5人に1人の文化部の生徒が、ブカイクによる本事業により、スポーツが好きになったと回答している。「やや嫌いになった」理由として、「周りの人よりできなかった」との回答であった。

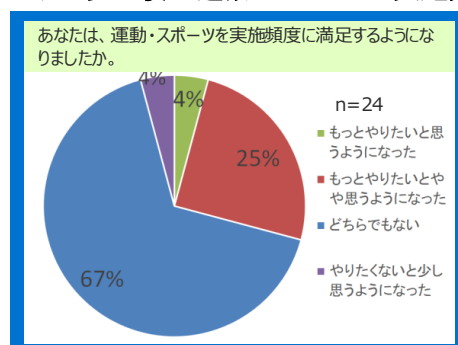
図表 74：ブカイク参加後の運動・スポーツへの印象（文化部生徒）



(2) スポーツ実施頻度に係るスポーツ意欲について

ポストアンケート内の設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、（普段の学校の体育の授業以外で）あなたは、運動・スポーツを実施頻度に満足するようになりましたか。」において、「もっとやりたいと思うようになった・やや思うようになった」との回答は29%と、ブカイクの活動によって、約3人に一人が実施意欲の向上が図られたことが示唆される。

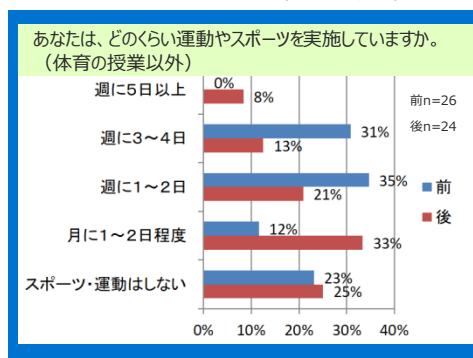
図表 75：ブカイク参加後の運動・スポーツ実施頻度満足度



2 文化部生徒のスポーツ実施の習慣化について

運動やスポーツの実施頻度（体育の授業以外）について、プレアンケートとポストアンケートで調査した結果、「週に1～2日以上」の実施した運動部生徒は、事前で66%、事後で42%で、22p下降した。

図表 76：運動・スポーツ実施頻度（文化部生徒）



【帰宅部の実施効果】

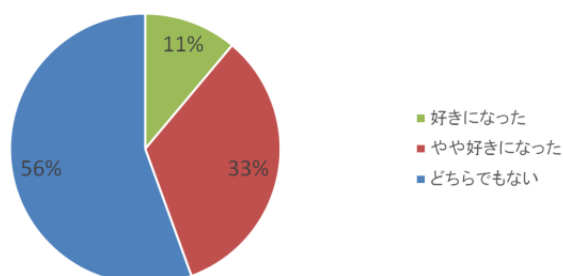
まずは、生徒全員のうち11%が帰宅部（9名）であり、本事業の実施効果を事前・事後アンケートにより検証した。

1 帰宅部のスポーツの実施意欲の改善について

(1) 運動・スポーツが好きになったか？

ポストアンケートの設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、あなたは、運動・スポーツをすることは好きになりましたか。」に対して、「好きになった」（11%、1名）、「やや好きになった」（33%、3名）と答えた生徒は合わせて44%であり、文化部の生徒に比べ、帰宅部の生徒は、ブカイクによる本事業によりスポーツが好きになったとの回答率が高かった。「やや嫌いになった」等の否定的な回答はなかった。

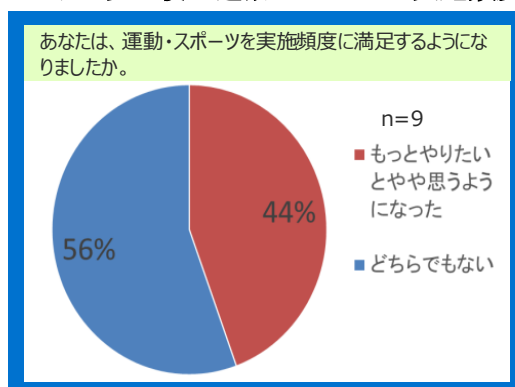
図表 77：ブカイク活動参加後の運動・スポーツへの印象（帰宅部生徒）



(2) スポーツ実施頻度に係るスポーツ意欲について

ポストアンケートの設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、（普段の学校の体育の授業以外で）あなたは、運動・スポーツを実施頻度に満足するようになりましたか。」において、「もっとスポーツをやりたいとやや思うようになった」が44%（4名）、帰宅部生徒の約半数がブカイクの活動によって、スポーツの実施意欲を向上させた。

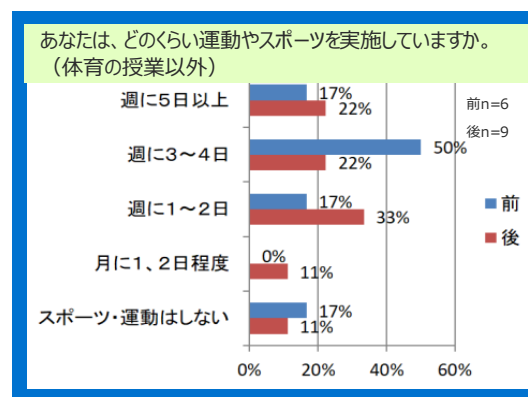
図表 78：ブカイク参加後の運動・スポーツ実施頻度満足度



2 帰宅部生徒のスポーツ実施の習慣化について

プレアンケートとポストアンケートで調査した結果、「週に1～2日以上」の実施した運動部生徒は、プレで84%、ポストで77%で、7p下降した。

図表 79：運動・スポーツ実施頻度（帰宅部生徒）



以上、実施効果の検証結果をまとめると以下のとおりである。

図表 80：実施効果の検証結果まとめ

ターゲット	現状	目標	実績
① 運動部	—	スポーツ実施意欲の向上 50%	スポーツ実施意欲の向上 55%
	—	スポーツ支援意欲の向上 30%	スポーツ支援意欲の向上 55%
	他の運動部活動の参加 0%	他の運動部活動の参加 30%	他の運動部活動の参加 35%
② 文化部	—	スポーツ実施意欲の向上 50%	スポーツ実施意欲の向上 29%
	スポーツ実施頻度 66%	スポーツ実施頻度 70%	スポーツ実施頻度 42%
③ 帰宅部	—	スポーツ実施意欲の向上 50%	スポーツ実施意欲の向上 44%
	スポーツ実施頻度 84%	スポーツ実施頻度 85%	スポーツ実施頻度 77%

5. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）

【運動部生徒におけるスポーツ実施改善の要因の分析】

1 運動部生徒のスポーツ実施意欲向上に寄与した要因

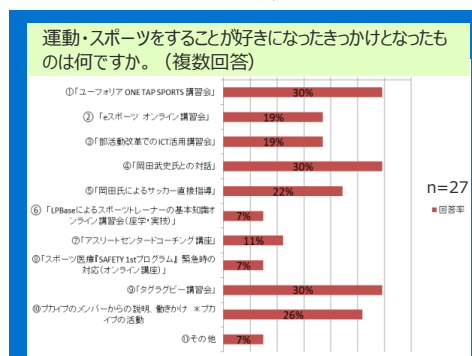
(1) 好きになった要因

ターゲットのスポーツ実施意欲向上に寄与した要因について、「好きになった」「やや好きになった」と回答した27名に対して、その好きになったきっかけとして挙げられた事業は分散している。

そのうち高い回答率であったのが、事業2のICTを活用したスポーツ・モニタリングシステムを構築し、コンディションの管理をすることを目的に導入した①「ユーフォリア ONE TAP SPORTS 講習会」（30%）、「体育系部活と文化系部活」のボーダーレス化等の部活動改革を目的とした有識者による講演④「岡田武史氏との対話」（30%）、多目的の経験やスポーツ初心者やスポーツの実施にブランクのある生徒のスポーツ意欲向上を目的に行った「ラグビー講習会」（30%）であった。これら3つの事業について3分の1の運動部生徒が好きになったきっかけとして挙げている。

次に続くのが、「ブカイクからの説明・働きかけ」も26%と、自分達の仲間であるブカイクの活動全般に関して、スポーツが好きになるきっかけと回答している。

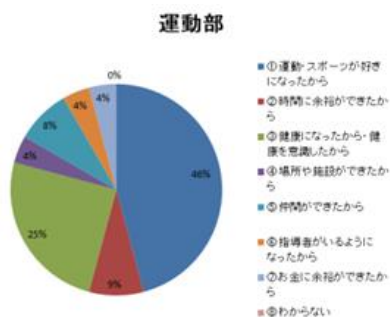
図表 81：運動・スポーツを好きになったきっかけ



2 運動部生徒のスポーツ実施の習慣化の要因

運動やスポーツをする時間が増えたと回答した13名（27%）について、その増えたきっかけを挙げてもらったところ、「運動・スポーツが好きになったから」が46%（11人）と一番多く、次に「健康になったから、健康を意識したから」が25%（6人）、「時間に余裕ができたから」、「仲間ができたから」がともに9%（2人）であった。

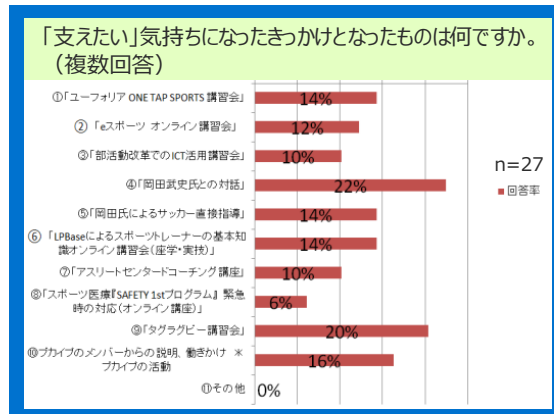
図表 82：運動・スポーツ実施の時間が増えたきっかけ



3 運動部生徒の「支える」意欲の向上の要因

「支える」意欲向上に寄与した要因は、本事業全ての活動に分散している。中でも、「岡田武史氏との対話」が一番多く22%、次に「タグラグビー講座」20%と比較的高いことが示唆された。

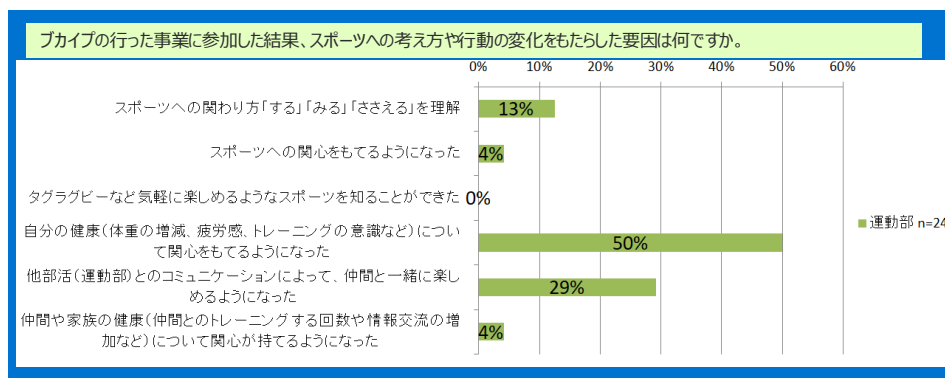
図表 83 : 「支える」意欲の向上の要因（運動部生徒）



4 運動部生徒にスポーツの考え方や行動の変化をもたらした要因

設問「ブカイクの行った事業に参加した結果、スポーツへの考え方や行動の変化をもたらした要因は何ですか。」に対して回答した24名のうち、「自分の健康（体重の増減、疲労感、トレーニングの意識など）について関心をもてるようになった」との回答が50%、次に「他部活（運動部）とのコミュニケーションによって、仲間と一緒に楽しめるようになった」が29%と、運動部生徒にとって、モニタリングの導入やブカイクのボーダーレス化の活動が、要因として相対的に大きいことが示唆されている。

図表 84 : スポーツへの考え方等の変化の要因

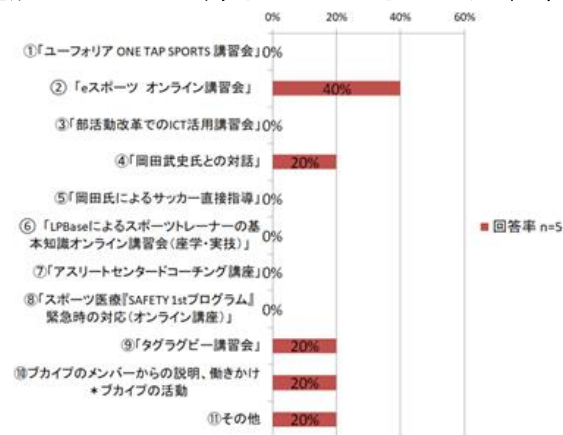


【文化部生徒におけるスポーツ実施改善の要因の分析】

1 文化部生徒のスポーツの実施意欲の改善の要因

ポストアンケート設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、あなたは、運動・スポーツをすることは好きになりましたか。」において「好きになった・やや好きになった」（5名）に対して、好きになったきっかけを尋ねたところ、高い回答率であったのが、気軽にスポーツに楽しむことを目的に開催した「e スポーツ オンライン講習会」が40%（2名）であり、その他「岡田武史氏との対話」（1名）、「ラグラグビー講習会」（1名）、「ブカイクのメンバーからの説明、働きかけ」、「その他」がそれぞれ1名であった。特に、文化部生徒にとって、「e スポーツオンライン講習会」が気楽にスポーツを楽しむ入り口として一定程度の効果がみられた。

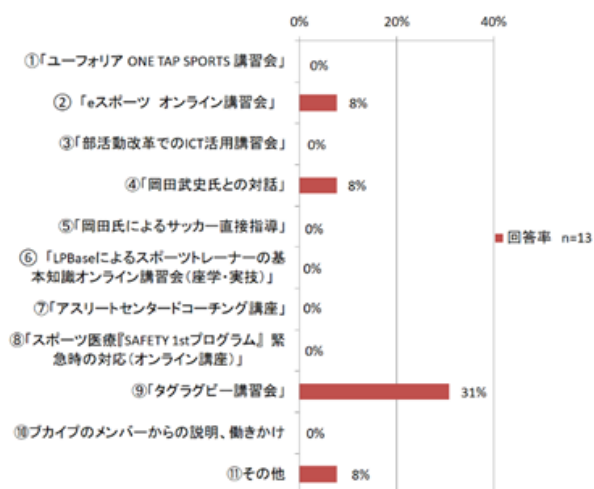
図表 85：運動・スポーツを好きになったきっかけ（文化部生徒）



2 文化部生徒のスポーツ実施頻度の意欲向上の要因

設問「あなたは、現在の運動・スポーツの実施頻度に満足していますか。」において、「もっとスポーツをやりたいと強く思う・やや思う」と回答した13名（54%）が思うようになったきっかけとして、文化部生徒の全員が参加した「ラグラグビー講習会」を挙げる者が30%（4名）であった。文化部生徒の全員が参加した「ラグラグビー講習会」の影響が相対的に大きいことがわかる。

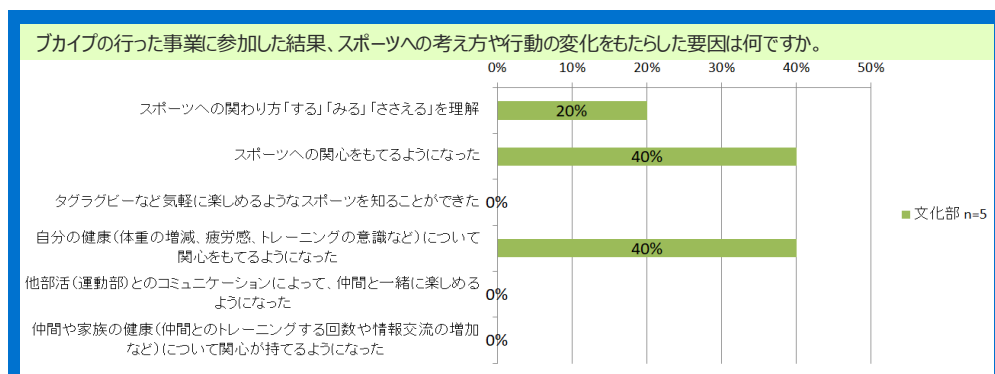
図表 86：運動・スポーツの実施意欲向上のきっかけ（文化部生徒）



3 文化部生徒にスポーツの考え方や行動の変化をもたらした要因

設問「スポーツへの考え方や行動の変化をもたらした要因は何ですか。」に回答した5人のうち、「自分の健康（体重の増減、疲労感、トレーニングの意識など）について関心をもてるようになった」、「スポーツの関心をもてるようになった」がともに40%、「スポーツへの関わり方『する』『みる』『ささえる』を理解」への回答が20%と、文化部生徒にとっては、コンディショニング管理の講座の導入や校内でのブカ
イプによる他生徒への関心意欲の向上の取組等が、変化の要因として挙げられている。

図表 87：運動・スポーツへの考え方等の変化（文化部生徒）

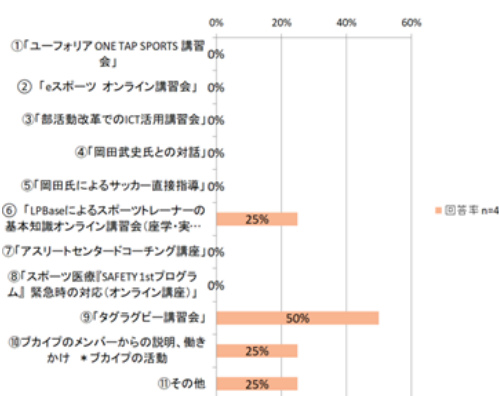


【帰宅部生徒におけるスポーツ実施改善の要因の分析】

1 帰宅部生徒のスポーツの実施意欲の改善の要因

ポストアンケートの設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、あなたは、運動・スポーツをすることは好きになりましたか。」により、「好きになった・やや好きになった」と答えた4名（43％）について、「好きになった」きっかけは、高い項目から順に、気軽にスポーツに楽しむことを目的に開催した「ラグラグビー講習会」が2名（50％）、続いて「LPBaseによるスポーツトレーナーの基本知識オンライン講習会（座学・実技）」、「ブカイクのメンバーからの説明、働きかけ」がそれぞれ1名（25％）の回答であった。帰宅部生徒全員9名が参加した「ラグラグビー講習会」に加え、LPBaseによるスポーツトレーナーの基本知識オンライン講習会」は、実技がプログラムの中に入っており、座学だけでない実技が「好きになった」要因として考えられる。（他に実技を含む講座は「⑤岡田氏によるサッカー指導」だが、これには帰宅部生徒は参加していない。）

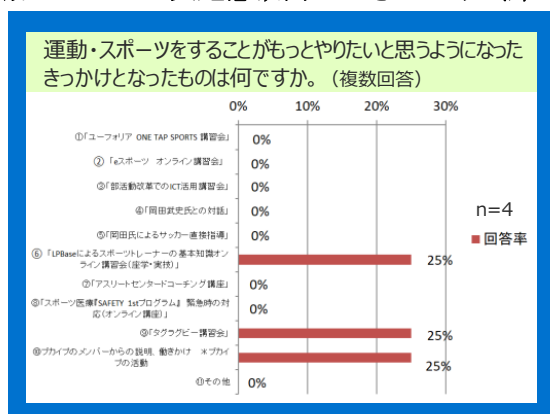
図表 88：運動・スポーツ実施頻度改善のきっかけ（帰宅部生徒）



2 帰宅部生徒のスポーツ実施頻度に係る意欲向上の要因

設問「ブカイクの活動に参加した後（10月以降）、（普段の学校の体育の授業以外で）あなたは、運動・スポーツを実施頻度に満足するようになりましたか。」において、「もっとスポーツをやりたいとやや思うようになった」と回答した4名（44％）が、そう思うようになったきっかけとして、帰宅部生徒の全員が参加した「ラグラグビー講習会」、「LPBaseによるスポーツトレーナーの基本知識オンライン講習会（座学・実技）」、「ブカイクのメンバーからの説明、働きかけ」がそれぞれ1名（25％）であった。

図表 89：運動・スポーツ実施意欲向上のきっかけ（帰宅部生徒）



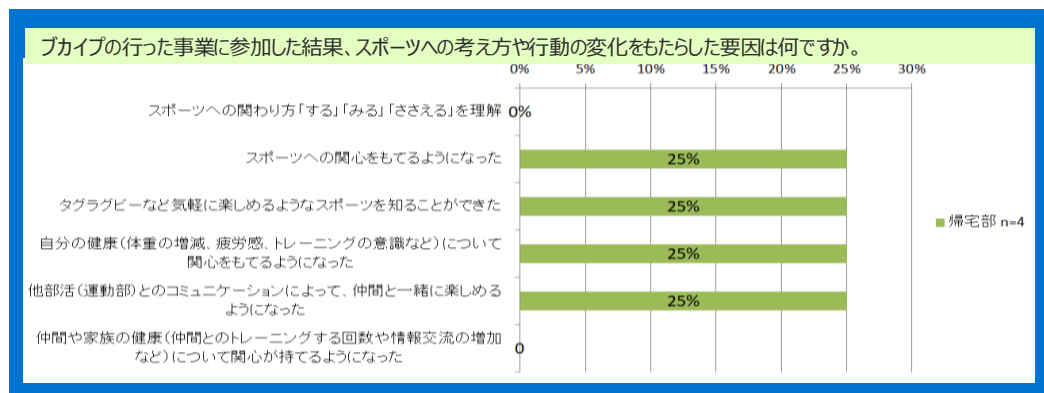
3 帰宅部生徒にスポーツの考え方や行動の変化をもたらした要因

設問「ブカイクの行った事業に参加した結果、スポーツへの考え方や行動の変化をもたらした要因は何ですか。」に回答した4人のうち、「スポーツの関心をもてるようになった」「ラグビーなど気軽に楽しめるようなスポーツを知ることができた」

「自分の健康（体重の増減、疲労感、トレーニングの意識など）について関心をもてるようになった」、「他部活（運動部）とのコミュニケーションによって、仲間と一緒に楽しめるようになった」がともに25%と、帰宅部の生徒にとっては、変化の要因が分散している。

帰宅部の生徒にとって気軽に楽しめるスポーツの体験や、自分が所属していない部活動への参加がスポーツ増加の要因となっていることが明らかとなった。

図表 90：スポーツへの考え方等の変化（帰宅部生徒）



6. 今後の事業展開予定

(1) 事業継続や横展開に向けたポイント、課題

●ポイント

- 1 部活動改革プロジェクトチーム（ブカイク）の生徒達を中心とした複数スポーツのノーマル化及びボーダーレス化の取組
本事業では約3割の運動部の生徒が他の運動系部活動に参加し、一定の効果を上げたが、さらに文化部の生徒も参入できるよう具体的な計画を立て進めていく予定。
- 2 文化部、帰宅部の生徒達も一緒にスポーツを楽しめる機会の創出
今回導入したタグラグビーを今後も活用し全員が安全で気楽にスポーツを楽しめる機会を、ブカイク主導を作り出していく。
- 3 専門家からの遠隔指導を強化
本事業でつながることができた各種専門家の方々から継続的に指導・助言が受けられる連携体制を構築する。
- 4 本校兼部を実現するための諸規約の改正
本校で本格的に兼部を推進するために、部活同関連予算の執行規約を変更する。そのために、ブカイクが主導となって、PTA及び生徒会と協議をはじめ、次年度4月までに実現する予定である。
- 5 学校部活動から総合型地域スポーツクラブへの移行
現在、鹿追町の総合型地域スポーツクラブの本校との連携を進めている途上であり、サッカー、陸上をはじめとして様々な共同事業を、本事業内外で進めることができた。完全なる本校部活道の総合型地域スポーツクラブへの移行も視野に今後も連携を強化していく。

●課題

- 1 長期的な計画及び実施プランの作成
生徒主体の部活同改革を目指す際、大人に比べ相当な時間と労力が発生しており、今後ブカイクの取組は1～2年の長いスパンで、余裕をもって生徒達が自分達のアイデアを考案し実践するプロセスを実現する必要がある。
- 2 事業運営に従事する人材の増員及び再委託
本事業を企画・運営するまでは、本校の教職員と今回の構成団体との連携で実施することができたが、データ収集、実施内容の検証や報告書作成の業務に関しては校務と並行して遂行することに難しさを感じた。よって、次年度からは、構成団体もしくは民間等にそれらを再委託して運営する必要がある。

（２）次年度以降の事業継続、横展開の計画

●自立的な事業継続、横展開の計画

１ ブカイクによる兼部の制度化、諸規約の改正

上記ポイント４のとおり実施する工程は次のとおり。

３月初旬 ＰＴＡ予算執行規約について、ブカイクと教職員との協議開始

３月末 ＰＴＡ予算執行規約の改正案作成、ＰＴＡ役員会で協議

４月中旬 ＰＴＡ総会にて、ＰＴＡ予算執行規約の改正案提出

承認されれば、令和３年度から執行

２ ブカイクによる文化部、帰宅部に対するスポーツ導入の機会の創出

３月初旬 ブカイク主催による部活動ボーダーレス週間の設置案の立案

各部からの招待イベントの立案

４月初旬 ブカイクから教職員に提示

４月中旬 部活同ボーダーレス週間の実施

部活同招待イベントの実施

３ 専門家からの遠隔指導を強化し、地方ロールモデルの創出

３月中旬 本事業の講師に再度オンラインでの講習の実施の可否を交渉

４月中旬 了承をえた講師によるアスレティックトレーニング、モニタリング等の講座を、新入生等を対象に実施

４ 町役場、町教委と連携した総合型地域スポーツクラブの設置、マネタイズの仕組みづくり

２月末 高校、町役場、町教委と３者で、総合型地域スポーツクラブの各種競技セクションの創出について協議開始

３月末 指導者を確保したセクションから、給与支払い等マネタイズ案の作成

５月中旬 担当候補者等選定し、活動開始

５ 事業運営に従事する人材の増員及び再委託

２月末 高校、町役場、町教委と３者で高校スポーツ振興に資する人材確保の在り方等の協議

８月初旬 地域おこし隊、もしくは、ふるさと納税企業版の活用案等、町役場・町教委に提示。

１１月初旬 町の次年度一般予算案に上記の人材確保案に盛り込むよう依頼

(3) 今後の事業展開に向けて期待される sport in Life プロジェクトにおける取組

●期待すること

- 1 公立高校と町の連携によるあらたなスポーツ環境づくりのために、事業期間を2年間の単位としていただきたい。

公立高校における Sport in Life プロジェクトの執行は、授業等に支障がでないよう、1年を見通したプログラムの年間計画表への位置付けが必要となるため、その準備及び結果分析等の作業も見越し、2年の事業期間が望ましい。

- 2 地方の小規模校スポーツ振興ロールモデルとなるために、道立高校と地元自治体（鹿追町）との連携による総合型地域スポーツクラブ設置、マネタイズの仕組みづくりに向けて、さらなるサポートを期待したい。

1 のとおり事業期間を得た場合、綿密な準備工程に従い、各ステークホルダーとの協議及び準備が可能となり、総合的地域スポーツクラブの新セクションの創設も含め、地方の高校をとりまくスポーツ環境構造の改革が実現できる。

- 3 ICT を活用した、遠隔での専門家指導の強化をさらに御支援いただきたい

より強い部活動をもとめて都市圏に生徒が流れる昨今の流れをとめるためには、地方においても中央の専門家から質の高い指導をうける環境を整備する必要がある。そのため本校は、本事業においても ICT を最大限活用したが、是非、ICT 活用及び遠隔指導を可とする講師等の紹介及び金銭的な支援につとめていただきたい。

7. 終わりに

人口5千人の鹿追町に唯一存在する公立高校が、本事業に採択され、生徒数減で悩む小規模校の課題を解決するため、様々な事業を実施させていただいたことに、心から感謝申し上げます。

本事業によって、都市部から離れた郡部校であっても ICT を活用すれば、スポーツに関する最先端の知見を獲得することができ、かつて少人数でチームが組めない、練習も寂しい、だからモチベーションも上がらないと嘆いていた生徒達が、この実質3か月の事業期間の後、見違えるように部活動に取り組む姿は、結果分析のとおり、運動部生徒のスポーツ実施意欲の向上が図られたことを証明している。さらに、日常的にスポーツ未実施の文化部、帰宅部の生徒達も、コロナ対策で自由な動きがとれないという制限の中で、しかも冬季という不利な条件の中でも、ブカイクを中心に自分達の仲間が部活動をはじめ、スポーツ振興のために主体的に動いているのをみて、スポーツ実施意欲を上げている者が複数現れたことは、本事業による大きな恩恵であると言える。

さらに、本事業によりただ単にスポーツの機会を与えただけでなく、スポーツに関する科学的なアプローチを学ぶ機会が多く設定されたことから、スポーツにおいて充足感やリラックス等の感覚の獲得以上に、社会で役立つ様々な能力の向上に役立つことに気づいた生徒が多くいた。また複数スポーツの経験が技術の修得・向上に効果的だったという調査結果は、スポーツがもたらす様々な可能性を示唆している。これは、ハワード・ガードナーが唱える多重知性論 (Multiple Intelligence) における身体・運動的知能 (bodily-kinesthetic intelligence) と他の知能群との関係性を今後探究する上で大変有益な資料となることだろう。

働き方改革も含めて地方の公立高校のスポーツ環境づくりを目指し生徒主体で取り組んだが、構造改革するには時間があまりにも短く道まだ半ばであるが、今後の地方の小規模校のスポーツ推進ロールモデルを構築するため、引き続き鋭意取り組んでいきたい。

最後に、本事業の実施に多大なるご協力ご支援をいただいた **knots associates** 株式会社、一般社団法人 **Sports X Initiative**、日本電気株式会社 鹿追町教育委員会、北海道鹿追高等学校体育文化後援会、北海道鹿追高等学校部活動活性化プロジェクト実行委員会、そして各講座を担当いただいた企業・団体の皆様、御指導いただいた日本総研の皆様、そしてスポーツ庁の皆様に感謝を申し上げ、まとめとしたい。

参考資料 アンケート調査票・分析結果詳細（別添参照）